波風ユウ物語

游斗

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あるとき四代目火影波風ミナトとうずまきクシナの息子が産まれた。九尾を封印され、それでもめげずに努力することでたくさんの仲間を得る。

そして後の七代目火影となった

でもそれとは若干違う物語となる

もう一人のミナトとクシナの息子によって

物語は変わっていく

これはうずまきナルト物語であり、

波風ユウ物語でもある

ナルトの二次創作です
誤字脱字等あると思いますので感想等よろしくお願いします

目次

産まれた直後と事件 ―――― 1
火影様に文句を言ってしまった・・・ 6
カカシさんと忍術の難しさ ―――― 11
友達一人目！ ―――― 15
シスイさんを助けなければ！ ―――― 19
事後報告・・・ また新しい友達できた!! 26
水遁と火遁で水遁が負けるわけないんだよなぁ ―――― 30
ユウの日常 ―――― 37
ナルト出陣！ ―――― 42
下忍試験！ ―――― 50
勝負！鬼人対コピー忍者！＋α ―――― 58
チャクラって大事！ ―――― 68
英雄参上！ ―――― 75
閃光の息子ＶＳ氷遁の子 ―――― 82
協力戦線！木の葉と霧！ ―――― 86
報告と特訓 ―――― 93
第１の試験 ―――― 98
第２の試験開始！大蛇丸対ユウ！ 105
大蛇丸を止めろ！ ―――― 111
なんとかクリア！第２の試験！ ―――― 116
休息、シスイさんの家で ―――― 125

第３の試験開始 ―――― 129
タクトの秘密 ―――― 133
第３の試験のまとめ！ ―――― 139
天才＆秀才ＶＳ天才 ―――― 144
ナルトＶＳキバ　成長の証 ―――― 153
悔しさと失望 ―――― 159

産まれた直後と事件

「よかった…　！成功した！」
「九尾は…　大丈夫かい？クシナ…」
「うん…　なんとか大丈夫だってばね…」
「いや、まだじゃ！」
「ビワコ様…　？それはどういう…」
「う、う、痛いってばね～!!」
「えっ!?また!?」
「双子だったということじゃ！まだ続けるぞ！」
「は、はい！でも…　その前に飛雷神の術！」

「ミナトか…　？」
「はい！この子をお願いします！」
「成功したのか！」

「はい！でも双子だったのです！また俺は戻ります！」
「わかった。気を付けるのだぞ」
「はっ！」

「すみません！ユウを渡してきました！」
「大丈夫だ」

この時、二人の子供が産まれた
波風ユウとうずまきナルト
二人とも波風ミナトとうずまきクシナの息子だったが
その人生は真逆といえるものとなる
これはそのほんの序章に過ぎない

あれ？おかしいな？目を開けると金髪の見たことある顔
持ち上げられたかと思えばすぐに別なところに行ってまた見たことのある顔・・・今のってまさか・・・　四代目火影波風ミナト!?ここにいるのは三代目火影猿飛ヒルゼンにすごく似てるし・・・　そんなことありえるか!?ＮＡＲＵＴＯ疾風伝っていうのは漫画の話じゃ・・・・
「この子を頼みます！」
四代目が俺を三代目に託してまたどこかに行った
俗に言う飛雷神の術？なんで俺は冷静なこと考えてんだ？
ヤバい本当に頭おかしくなる
夢なのか？夢にしてはリアル過ぎるんだが体温とか
も、もし俺がＮＡＲＵＴＯの世界に転生したとしたら・・・？
何考えてんだ・・・そんなことあるわけねーのに・・・
本当に頭がおかしくなっている
取り敢えず寝よう・・・　寝れば覚めるはず・・・

（ごめんね…　何もすることができなくて…）

「…　!?」

頭の中に直接聞こえたようなその声を聞いた直後に

九尾は封印されたらしい…

つまり俺が聞いた声は…　ミナトさんの…

「カカシよ!」

「なんでしょうか?」

「この子供はミナトの息子じゃ!今はお前が預かってくれ!」

「ミナト先生の…　わかりました!」

俺がまた違う人に受け渡された

本当にどうなってるんだ…　?

今度の人は…　写輪眼のカカシ…　コピー忍者…　そして最後には六代目火影にまでなった人…

「それにしても…　ミナト先生そっくりな子だな…」

カカシさんはそんなことを言っている

やっぱり俺は四代目火影の息子に産まれたのか…　?

それなら…　八卦封印があるはず…
ほとんど動かない身体を無理やり動かして見ようとする…
くっそ…　不便な身体だなこれ…
「?どうしたんだ?」
カカシさんが心配してくるがそれどころではない
しかし、色々なところを見たが八卦封印はなかった…
そ、それじゃあ今からうずまきナルトが産まれるってことか…　なんで俺に八卦封印をしなかったんだ…　?
今の俺じゃあ考えることしか出来ない…
「九尾…　生きていてください…　ミナト先生…」
俺の産まれたときは九尾が暴走しなかったとかか?
いや、オビトが口寄せすることは容易かったはず…
生かされたのか…　?なんで…
あり得ないことの連続で頭がパンクしそうになっていた…
頼むから史実と変わって生きていてくれ…
ミナトさん…

火影様に文句を言ってしまった・・・

九尾事件から三年がたった
俺はその頃には自分が転生してしまったと認識していた
俺は今も産まれた木の葉隠れの里で過ごしてる
なんか周りの人たちは英雄の息子とか時期火影候補とか勝手なことばっかり言ってきやがる
俺が英雄の息子だとしたらナルトだって英雄の息子だろうが・・・
やっぱりあの後、ナルトは産まれた
八卦封印で九尾を封印されたのも間違いないらしい
里の大人たちは俺とナルトを話さないようにしていた
マジで迷惑なんだよなぁ・・・
あと地味に気になるのはなんで俺の方が先に産まれたのに名前がナルトじゃなかったか・・・ 本当にそれだけは全くわからん
そして今、俺は火影室の目の前にいる
俺の力でナルトのことを変えれるならそうしたいから

それが一応兄として大切なことだと思った
「失礼します」
「おお、ユウか。なにようじゃ？」
「今日は三代目様に大事な話があってきました」

猿飛ｓｉｄｅ
ミナトの息子ユウが儂のことを訪ねてきた
年齢が３歳でありながら、礼儀をしっかりわきまえていて
尚且つ、人に意見を言える優秀な人材だ
流石、ミナトの息子といったところだ
そのわかさでここまでできるのもどうかと思うが･･･
そのユウが大事な話があると言ってきた
忍術を教えてほしいとかアカデミーに入れさせてほしいとかだと思っていた。しかし･･･
「何故、里の人たちに嘘をついているのですか？」
ユウはそう聞いてきた
素直に驚いた。そのようなことを気にする年齢ではないから

「な、なんのことじゃ？」
「はぐらかさないでください。俺は木の葉にある文献を全て調べさせて頂きました。俺の父である波風ミナト
そして俺の母はうずまきクシナです
そしてうずまきの姓をもち、あの日に二人の子供を産んだのは母さんしかいません。俺の弟なんですよね？うずまきナルトは」
なんという奴じゃ・・・　文献を全て調べるじゃと・・・
普通の人にはできないことだ・・・
それこそミナトでも出来るかどうか・・・
でも実際ユウが言ってきたことは事実・・・
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
まあ実際に文献なんて調べてないんだけどね
話を知っている俺からすれば調べなくたってわかる
ナルトは俺の一番好きな漫画だから・・・
「その通りじゃ・・・」
三代目は俺の弟ということを認めた
思ったより折れるの早かったな・・・

「何故嘘を付くのですか?ナルトは俺なんかよりも讃えられるべき人です。自分の体で九尾を封じ込めているんですから。本当の英雄ですよ」
「わかっておる･･･ だが･･･ 九尾がただただ封印されたと言うとナルトに被害がいく可能性もある･･･ だから仕方なくそうしたのじゃ･･･」
　まあ予想通りの返し･･･ 原作でもダンゾウが似たようなこと言ってたしな･･･
「本当ですか?確かにそんなことも考えてたのかもしれませんが何より九尾そのものとすることで自分たちの地位を下げないようにしたのではないのですか?」
「そ、そんなことはない!」
「いや、三代目様がそう思っていたとしても他の上役はそう思ってますよ」
「･････」
「すみません。これじゃあただの迷惑ですよね･･･
　本題は俺がナルトに近づかないようにするのをやめてください」
「どういうことだ?そのようなことを言ってはないが･･･」
　やっぱり無断か･･･ なんなんだあの大人たちは･･･
「そうですか･･･ それならすみません･･･ 失礼しました」
「ちょっと待て･･･ ユウ、お前には悪いことをした･･･
　何か頼みたいことはないのか･･･ ?」

これは予想外の展開だがラッキーだ

「それなら…　母さんのうずまき一族封印術を教えてください」

「わかった…　後日、巻物を届ける」

「ありがとうございます」

カカシさんと忍術の難しさ

後日届いたので封印術を練習することにした
本当に難しい。うずまき一族の秘伝である金剛封鎖はなんとか1ヶ月で使えるようになったが、他はマジで難しい
八卦封印、五行封印、五行解印、そして使う気はないが
屍鬼封尽、本当に会得できない
まあぶっちゃけ八卦封印何に使うかと言われればわからないからいいといえばいいような気もするが…
それでも諦めないで続けないとな…
これからは金剛封鎖の応用技を作りたいとも思っている
俺には水遁と風遁、雷遁の適正があり、特に水遁が強いらしい
だから最近は水遁の練習をしているが…
また陰陽遁も使えるらしい
何せ見本がいない…　水遁を使えて強い人って
木の葉で生きているだと三代目様かあの人しか思いつかないんだよなぁ…

そんなことを考えてると本当に思っていた人がきた
「ん?そこにいるのはユウか?」
「カカシさんお久しぶりです」
カカシさんは昔俺と遊んでくれていた
よく会って話を聞かせて貰ったりもしてた
そしてこの人は三代目様以外で今木の葉にいる忍で一番術に長けていると思っている
もちろん写輪眼もあるから当然術は凄いがカカシさんは写輪眼を使わなくても術が上手い
「何をやっているんだ?」
「水遁をやってるんですけど上手くいかなくて・・・」
「なんの術だ?」
「えっと、覚えたいのは水分身の術、水龍弾の術、大瀑布の術です」
「どれも会得難易度が高い忍術だぞそれ
アカデミーに入ってもないのにやるのは難しいだろ」

「少なくとも水分身は覚えておきたいんですよね～」
「なんでだ？」
「ちょっと試したい術があってそれには分身系統の術が必要なんですよねー」
「そうか・・・　水分身ならまだできるかもしれない
　付き合おう」
「本当ですか！ありがとうございます！」
　カカシさん神！ここで水分身を覚えられたら色々と出来る！それこそ応用技だって・・・
「取り敢えず水分身を見せよう」
　そういうとカカシさんは印を組んで分身した
「影分身よりは実力は劣るが会得難易度がこっちの方が低い。それに使い方によってはこっちの方がいいというやつもいる。一回攻撃してみろ」
「はい！」
　カカシさんの分身を攻撃すると水がでてきた
　まあそういう技なのだが
「影分身よりやられたときの動きは水によって鈍くなる
　まあ誤差といえばそれまでだがな」

「なるほど…」
「さて早速教えるか…　俺の訓練は大変だからな…　？」
「もちろん！望むところです！」
そうして俺は月曜日と木曜日にカカシさんと訓練
それ以外の日は自分の封印術、風遁、水遁、雷遁の特訓をすることになった

友達一人目！

術の特訓を頑張ってるなか、他にやりたいことがあった
ナルトと仲良くなることだ
ナルトは里の奴らに蔑まれてるが、そんなの関係ない
血液関係は俺と兄弟だし、早くから仲良くしておきたい

ナルトはよくこの公園にいるらしい・・・　見つけた
俺が近づいていくと
「な、なんだってばよ!!」
怯えたように俺に叫んできた
今のナルトだったら当然といえば当然なのかもしれないが
「俺は波風ユウ、俺と友達になってくれないか?」
我ながらそのまま過ぎたなと後から思った
でもそれが一番手っ取り早かった
「お、俺と友達に・・・　?」

「ああ。お前と」
「ふ、ふん！お前がそこまで言うなら友達になってやってもいいってばよ！」
「ありがとう」
「俺はうずまきナルト！火影になる男だってばよ！」
「火影になりたいの？」
「ああ！火影になって里のみんなを見返してやるんだ！」
「そっか！俺も応援するよ」
「えへへ。サンキューだってばよ」
照れながらナルトはそういった
本当になんでナルトを里の奴らは蔑すんでるか分からん
夢をもったいい子供なのに・・・
「ナルトは三代目様が好きなのか？」
「まあそうだってばよ。みんなから認められてるし、俺は
三代目のじいちゃんを越えることも目指してるんだからな！」
やっぱり三代目様は凄いなぁ・・・ 誰にも対等に・・・ か
そんな人にこの前文句言っちゃったけど・・・
「その、ユウは夢とかあるのか？」

そう聞いてきた
夢…　か。それどころじゃなかったから何も考えてなかったな…　それでも目標はある。ナルトの世界で犠牲になる木の葉の忍をほぼ救うこと。ミナトさんとクシナさんは流石に無理だったけどそれ以外の人は助けてみせる
「そうだな…　人をたくさん救ってみんなが笑顔で幸せに過ごせるようになるとかかな…」
自分でもくさいセリフ言ったなと思うが
まあ子供だからね。これくらい言うはず
「へ〜! 凄そうな夢だな!」
「うん。本当に大変なことだろうけどそれをやり遂げたいんだ」
「それなら火影になる俺の力も必要だな!」
胸をはってナルトが言ってきた
その通りだと思う
実際ナルトは多くの人の心を動かしてきた
物語のキャラも作品を読んでいた読者も
俺もそうだから
「そうだな。その時はナルトにも手伝ってもらうよ」

「もちろんだってばよ!」

一瞬忍術を教えようかと思ったがよくよく考えれば3歳なんだからまだやらせられないか

俺も3歳だけど

時間がもうちょっとたったら教えよう・・・

こうして俺の一人目の友達ができた

シスイさんを助けなければ!

あれから6年後ナルトとは大親友になり、ナルトが一人で悲しんでいることはほぼなくなった
それでも大人から蔑まれてるときは悲しそうだが…

俺は死ぬ気で術の練習をした
俺のチャクラ量はとても多いらしくナルトまでとはいわないが人柱力と同等くらいあるらしい
本当にドチートだよなぁ…
封印術は完璧に覚えてちゃんと応用技も作った
それとカカシさんの水遁だけで4年間かかった
その代わり水遁もヤバいレベルまでいったけど
そして今、俺はダンゾウの部下に目を盗られそうなうちはシスイさんを助けている
三代目様からうちはがクーデターをたてていることを聞き、そうなるとシスイさんが狙われるためシスイさんには申し訳ないが追いかけていた

そして遂にダンゾウの部下がきた
「うちはシスイ、その目を渡せ・・・」
「誰がお前たちのような奴らに渡すか!」
「そうか・・・ なら力尽くだ!」
そういって五人がシスイさんに襲いかかった
「水剛封鎖!」
「な、何っ!?」
俺が作った水遁と金剛封鎖の合わせ技
拘束術としては金剛封鎖すらも越える忍術だ
全員を拘束している間に水分身に術を変わってもらった
そしてシスイさんに近付いて
「速く逃げますよ!」
「え!? いやでも!」
「いいから! いきますよ!」
そういうと俺は残りの二年間で必死に覚えた父さんの技を使った
三代目様やゲンマさんたちの小隊に何回も会って教えてもらった
「飛雷神の術!」

そうして着いたのは火影室
「三代目様!」
「ど、どうした?ユウにシスイ…　?」
「ダンゾウの部下らしきものにシスイさんが襲われたので助けたのです!今は俺が拘束してますが、速く増援お願いします!あと、シスイさんは必ず守ってください!」
「な、なに!?そういうことなら儂がいく!
カカシ!」
「はっ!」
どうやら三代目様が直接来てくれるらしい
これは有難い
暗部になっていたカカシさんにシスイさんを託して俺に飛雷神を使うよう促した
「飛雷神の術!!」
そして俺が戻ってきた頃にはダンゾウもきていた
「ほう…　ミナトの息子か…　余計なことを…」
「黙れ!シスイさんは木の葉に必要な人だ!」
「儂は信用ならんのだよ…　あの写輪眼は強すぎる
儂が木の葉のために使う方がいいだろう?」

「ふざけるな！」
「ダンゾウ…」
「なっ…　!?ヒルゼン…　！」
本体の俺がダンゾウに向かって叫び
そのことよりもまず三代目様がいることに驚いていた
「ダンゾウ…　何故じゃ！何故こんなことを！」
「言ったであろう！うちはは悪の一族！そんな奴らが信用できるか！」
「木の葉は人と人が協力してできているのじゃ！
それが先代の火影様たちが残してきた火の意思じゃ！」
「若造なんかに木の葉を任せられるか！」
「ダンゾウ！お主を根の長から解任する！
もっとよく考えるのだ！」
「くっ…　！」
そんな話を三代目様がしていたとき後方から気配を感じた
「誰だ！」
反射的にそう叫んだ
そうして出てきたのはうちはの人だった

どうやらシスイさんを探してきたらしい
「うちはフガク…　本当にすまなかった!
儂の力が及ばないばかりに…　うちはに酷い風評被害を与えてしまった…」
「三代目顔をあげてください…　今の話を聞いて大体の事情は察せれました…　私はもうクーデターなど起こしません…　お前たちはどうだ?」
そういうとフガクさんの後ろから別のうちはの人たちがきた。どうやらみんな聞いていたようだ
「こういう仕方ねーよなー」
「シスイを助けて貰った恩もあるし俺もやらない!」

そうしてうちはクーデターの前のシスイ万華鏡写輪眼が盗られる事件はなんとか解決できた…
そして奇跡的にうちはクーデターも防ぐことができた
でも疑問に残っていることもあった
「すみません。フガクさん」
「ん?君はシスイを救ってくれた子だね
改めて礼をいう。ありがとう」

「いえ、当然のことをしたまでです」
「そうか…」
「だけど聞きたいことがあるんです。聞いても大丈夫ですか?」
「ああ。何でも聞いてくれ」
「うちはの方がシスイさんを探しにくるのはわかります
ですがフガクさんはうちはの中でもトップに偉い方、離れられた理由はなんでなんですか?」
そう聞くとフガクさんは少し驚いた後、こう答えた
「サスケが言ってくれたのだ」
「フガクさんの息子さんの?」
「ああ。今日、イタチとシスイとサスケで一緒にいたらしいんだが、先にイタチが任務で帰ったらしい
そしてサスケとシスイで遊んでたときに気配を感じたらしく、そしてその後シスイはすぐサスケに帰れと急に言った。そのことを不審に思ったから私たちに話して帰ってきてないことから探しにいくといった流れだった」
「… そうですか。ありがとうございます
サスケくんは優秀な子供ですね」

本当に助かった
シスイさんは助けられてもうちはクーデターを防ぐのは難しいと思っていた
本当にサスケには感謝しないと・・・
「いやそれはこっちのセリフと言ったところだ
流石、波風ミナトの息子だ」
「えへへ。ありがとうございます!」

事後報告・・・ また新しい友達できた!!

ダンゾウが根から解任されたあと
俺と三代目様は火影室に戻ってきた
そこには俺と同じくらいの年をした少女がいた
「シスイ・・・ すまなかった・・・ ダンゾウの悪事を見逃すところじゃった・・・」
「三代目顔をあげてください
こうして助かったのですから・・・」
「大丈夫なの・・・ ？シスイお兄ちゃん・・・」
「ああ・・・ あの子のお蔭でね・・・」
三代目様にいうと今度は俺の方を向いて
「ありがとう・・・ 君のお蔭で助かった」
「いえ。当然のことをしたまでです」
「えっと・・・ 君の名前はなんていうんだ・・・ ？」
「波風ユウです」
「そうか・・・ 俺はうちはシスイ

ユウ本当にありがとう」
「私は･･･ うちはサヤ･･･ お兄ちゃんを助けてくれてありがとう･･･」
シスイさんに妹? いなかったはずだけど･･･
俺が転生してきたからか･･･ ?
「当然のことだよ」
「ユウよくやった」
「ありがとうございますカカシさん」
「もう夜遅い。ユウはサヤをうちはに帰してから帰りなさい」
「わかりました」

一緒に歩いて帰っていた途中サヤから話しかけられた
「ねえねえ、ゆーくんはどうしてそんなに強いの~?」
「そんなに強くはないよ。でも理由があるとしたらカカシさんや三代目様とかに特訓をつけてもらってるからかな」
「私もゆーくんみたいに強くなれる?」
「頑張ればきっとね」

「じゃあ私もシスイお兄ちゃんに忍術教えてもらう！」
「じゃあ今度俺と勝負しよう！」
「うん！約束ね！
あっ！ここまでくればもう大丈夫！今度遊ぼうね！」
「うん！」
そうして俺は自分のアパートに帰った
「ふ～疲れたけど成功してよかった～」
家に帰ってきてまずその一言を倒れながら言った
シスイさんを助けるのは大変だったけどちゃんと止めれてよかったー
初めての戦闘が根っていうのは結構ヤバいと思うけど

場所は戻って火影室・・・
「本当にすまなかったのう・・・」
「大丈夫です。それにしてもユウは優秀な忍者ですね」
「そうじゃのう・・・ まだアカデミーにすら入っていないのに・・・ 流石ミナトの息子と行ったところじゃ・・・」
「あの根の者を拘束した術はうずまき一族の術ですか？」

「いやユウが自分で開発した術だな
俺と訓練している時に誰でも使えるうずまき一族の拘束術とか言っていた
実際難易度からしたらSランククラスにあたる術でしょう」
「そこまで･･･ 本当に凄い子供ですね」
シスイｓｉｄｅ
本当に驚いた･･･ あの時目は必ず守ってイタチに渡すつもりだったがあの子のお蔭で助かった
ユウが助けてくれたように俺もイタチとサスケの家族の絆を守らないとな。サヤみたいに俺を心配してくれる人もいるんだ･･･
「今度からは俺もユウに修行をつけてもいいですか?」
「ん? 別にいいと思うぞ」
よし! 恩はちゃんと返さないとな!

水遁と火遁で水遁が負けるわけないんだよなぁ

あれから三年シスイさんに幻術の対処法や体術を教えて貰った。シスイさんに紹介してもらったイタチさんには手裏剣術と剣術を教えて貰った
そのせいで戦闘するときに三代目様から誕生日に貰ったチャクラ刀を普段から使うようになってしまった
風遁の練習もして多少はできるようになった
ナルトには風遁・烈空掌を教えた
それだけ教えて後は自分で学ぶようにいった
何せ二年前に俺より先にアカデミーに入ったからな
俺が入らせてください！って頼んでもダメでした…
サヤとは今でも仲良くしてる
またしても火影室にきている
でも今回はちゃんと呼ばれてきたから！
「失礼します」
「おお。きたか。ユウ」

「三代目様今回は何のようですか？」
「お主にアカデミーに入って貰いたい」
「・・・二年前あれだけいっても入れてくれなかったのにですか？」
　そう皮肉をいうと
「あの時はすまなかった・・・　それも今回のためだったんじゃ・・・」
「どういうことですか？」
　理解が全然出来なかった俺は率直にきいた
「今年の生徒は血継限界や秘伝忍術を使える家系の者が多くてのう・・・」
　そういって俺に生徒表を渡してきた
　日向、うちはを始めとして奈良、秋道、山中、他にも様々な優秀家系の姓がみられた
　そこには見たことある顔・・・　というかサヤがいた
「お前の実力は上忍なら誰もが知っていることじゃ
　そこでお前に何かあったときの護衛等を頼みたい」
　まだ忍者にもなっていない子供に何言ってんだよ！
　でもアカデミーを卒業しないと下忍にもなれないし・・・
　やるしかないってことか・・・
「わかりました・・・」

「すまないのう・・・」
「いえ、大丈夫です」

そうして出た後適当にブラブラしてると
「あれ？何やってるんだユウ？」
声をかけてきたのはうちは一族で
イタチさんの弟のうちはサスケ
うちはクーデター防いだからいい子なんだよなぁ・・・
「いや適当にブラブラしてたんだよ」
「暇なの？」
うわぁ・・・ 煽られてるのかな・・・
でも怒ったりはしない・・・ 大人気ないからね・・・
「暇なら忍術の練習しなよ」
「うるさいっ！」
前言撤回！いい子じゃないです！

すぐ煽る！大人を煽るなぁぁ！
と心の中では思っているが外では
「そうだね・・・　サスケの言う通り練習しようかな・・・」
と誤魔化す
「練習するなら俺の相手になってよ
兄さんとシスイさんがいってたけどユウ強いんでしょ？」
一瞬悩むが特に用もなかったし、サスケが強くなれるならそれでいいと思い返事をした
「わかった。相手しよう。でもこのまま相手すると強すぎるから水分身でな」
「えーなんでだよ！」
「だから強すぎるからだって」
「ちぇ、しょーがねーの」

そうしてきたのは森の中
俺がよく訓練で使っているところだ

「じゃあ早速いくよ！」
「うん！」
そういって忍組手が始まる
流石に本気を出すのはヤバそうだからなるべく軽い技と体術で
「火遁・豪火球の術！」
サスケが口から火の玉をだす
凄いな～この年で使えるのか～
「水遁・水あられ！」
掌から出す水で火の玉を相殺する
「はぁぁぁ！」
忍術で戦っても勝てたいと踏んだか今度は体術で攻めてきた。けど甘いよ
後ろに一歩下がって蹴りを交わしてから腕を掴んで背負い投げ
だが、サスケもここで終わるかと手裏剣を投げてきた
サスケの手裏剣術の腕は凄いから流石にまずい
俺もチャクラ刀を使って手裏剣を弾き飛ばす
「刀！狡い！反則だよ!!」
「ええ!?そんなこと言われてもだなぁ・・・」

「いいから禁止！」
「わかった…　手裏剣だけにしよう…」
　そういって再戦闘
　サスケが投擲してくる手裏剣を全部手裏剣で当てて返す…
　ってできたらカッコいいんだけどまだそんな実力はないから秘伝忍術で弾き返す
「金剛封鎖！」
「え？うわぁぁぁ！」
　捕まれて叫ぶサスケ
　けどそこでまだ諦めないみたいです
「くっそ！火遁・豪火球の術！」
「水遁・水衝波！」
　下から水を吹き出して豪火球を消す
「まだ！」
　苦し紛れの手裏剣は勿論当たらず
「俺の勝ちだね」
　そういって拘束を外す
「ユウ強すぎだよ～これでだいたい十分の一なんでしょ？兄さんやシスイさんと同じく

らい強いんじゃない？」
「ははは。それはまだないよ。イタチさんもシスイさんもめっちゃ強いからな！」
「いつか絶対勝ってやるからな！」
そういってサスケは帰っていった

ユウの日常

アカデミーに入った俺は勿論どの分野でもトップをとれていた
ずっと特訓してたのだから当たり前だけど・・・
忍術に関してはアカデミーで習うものでまだ覚えてないのもあったから正直有り難かった
しかし、何より問題なのはクラスにもう一人俺の知らない奴がいた。最初は記憶違いかと思ったがそうではなかった
ちゃんと三代目様から貰ったリストにのっていた
ただ史実にはこの家系の同期はいない
・・・猿飛一族の者は・・・
三代目様にちゃんと確認するべきだった
適当に見てすぐ返してしまったのは俺のミスだ
そしてこのままだと多分俺とチームを組むことになるんだろう
「何考えごとしてんのー?」
この今、声を掛けてきたのが猿飛タクト

スッゲー明るくてクラスでもサスケと張るほど人気がある
体術、忍術に関してはめっちゃ凄い
もちろん俺には勝てないだろうが、サスケ、サヤレベルの実力がある
だけど幻術はからっきし
アカデミーだと当たり前なのかもしれないが
「いや何でもないよ」
「なんかあったらいえよ?お前は俺のライバルなんだから!」
なんか勝手にライバル認定されてしまっている・・・
まあそれはいいんだが・・・ めっちゃ絡んでくるんだよなぁ・・・
「ほら!ユウくんが困ってるでしょ!!」
でもこう絡みにくると女子が大体離してくれる
なんでだろ??タクトのこと好きだからなのかな?
「ちょ、ちょっとまて!おい!ユウ!今度勝負しようぜ!」
「別にいいよ」
これがいつもの流れ、アカデミーではこんな日常を贈っている

そしてアカデミーが終わると一人または

サスケ、ナルト、サヤに教えて訓練するときと
シスイさん、カカシさん、イタチさんそしてフガクさんにも教えて貰ってる
なんか申し訳ない…
フガクさんに至ってはうちは一族で一番偉いのに…
本当に申し訳ない…
勿論やる回数は少ない。フガクさんは本当に忙しいから
大丈夫だって言ってる…
みんなそういうと子供が気にするなとか言うけど気にするよなぁ…

今日はイタチさんとシスイさんにやって貰う日だった
先にきて練習していると…
「おーやってるなー」
「随分と上手くなってるじゃないか」
「シスイさんにイタチさん今日は早いですね～」
「それがサスケが着いてくるといって聞かなくてな…」
「ユウだけ兄さんやシスイさんと練習するのズルいんだから当たり前だろ！」
そういうとイタチさんの後ろからサスケがでてきた

「そういえばお前ユウにボッコボコにされたらしいじゃん～」
「うっ・・・ 次は負けないもんねっ!!」
「ん?それは聞いてなかったな。ユウどういうことだ・・・ ?」
写輪眼を使って見てくる
怖いよ!!
「いや・・・ サスケから挑まれて・・・ 手加減したんですけど・・・」
「そうか・・・ それなら今日の訓練は3倍だな・・・」
「えぇ!?」
イタチさんの訓練は鬼
マジで疲れる。成長するのは分かるが次の日絶対筋肉痛になるほど疲れる。それの3倍は死ぬ!
「勘弁してくださいよ・・・」
「そうだよ!兄さん!」
「サスケはイタチと特訓したいから来たんだもんな～?」
「うん!だからユウにばっかり構ってないで俺に特訓つけてよ!」
「・・・わかった。3倍は今度にしとこう」
うわぁ・・・ 今度終わったぁ・・・

まあ仕方ない…　今は今のことだけ考えて訓練しよう…
そうして日が沈むまで訓練をした

ナルト出陣！

「卒業試験を始めるぞ！内容は分身の術だ！」
そうイルカ先生がいって始まった卒業試験
分身の術は今の俺には簡単だがまだナルトには出来ないのだろう・・・ このあと起こることも見ておかないと
イルカ先生がこない場合だってある
「次！波風ユウ！」
そうして試験室に入り
「分身の術」
「合格！」
簡単に合格した
まあ既に水分身や影分身を会得してるから難なくクリアした
「次うずまきナルト！」
そういってナルトは入っていった
戻ってきたときの顔はとても悲しそうだった

そして外に行くとナルトを親たちが蔑んでいる
本当に酷いな･･･
ここからはナルトについていく
まあやっぱりミズキってやつがナルトに巻物をとるように促す
そして原作通り三代目様をおいろけの術で気絶させ、
一人で多重影分身の練習を始めていた
俺は影分身で三代目様のところで見ていた
「今度ばっかりはいたずらではすまされません!
火影様!!」
「その通りじゃな･･･　急いでナルトを探すのじゃ」
「はっ!」
そういって忍たちは探しにいった
そして三代目様は俺の方に近づいてきた
「他の忍は隠せても儂には隠せんぞユウ」
「やっぱりバレてましたか･･･」
「お前がナルトに盗むように促したのか?」
「いえ違います。別の犯人がいますよ」

「その答え方･･･ もう既に知っておるな･･･」
「教える気はありませんけどね･･･
木の葉はナルトを迫害し続けた。アイツがどうしようと俺はアイツの味方をしないといけません」
「くっ･･･ お前の言う通りじゃ･･･」
そういって三代目様は火影室に戻ろうとした
だが、その前に
「ナルトの安全は任せてください」
とだけいった
そういうと三代目様は安心したように
「任せた」
といった
その頃、森の方でも進展があった
イルカ先生がナルトを見つけたのだ
「ナルト･･･ その背中の巻物はどうした?」
「あっ!これ!ミズキ先生がこれのこと教えてくれたんだ!」
そんな話をしているとクナイが飛んできた

・・・が、そんなことはもう分かっている
中忍程度の投擲など対したことはない
「手裏剣影分身の術!」
俺は自分の手裏剣を分身させて全て弾き返した
!?」
ミズキは驚いてこっちを向いた
「お前か・・・　波風ユウ!」
「ユウ!?!?」
ナルトは驚いたように叫んだ
「なんでここにいる!」
「まあナルトの友達だからかな?」
「そんなふざけた理由で!」
「アンタの方がふざけてるだろ
生徒に勝手なことしやがって」
「お前は知らないだけだ!本当のことをコイツとお前に教えてやる!」
「ば、バカよせ!」
「12年前、お前の父親がバケ狐を封印した事件は知ってるな」

ナルトの父親でもあるけどな
「あの事件以来ある掟が作られた
しかしナルト！お前には絶対知らされない掟がな！」
「オレだけ・・・ !?」
「ナルトの正体がバケ狐だと口にしない掟だ！」
「え？どういうことだ!?」
「つまりお前がイルカの両親を殺し！波風ユウの父親も殺し！里を壊滅させた九尾の妖狐なんだよ！
お前は憧れであり！友達の父親である火影に封印された挙げ句！里のみんなにずっと騙されてたんだよ！
イルカも本当はお前が憎いんだよ！
どうだ!?ユウ！これがお前の父親とコイツの真実だ！」
ながったらしい解説を終わらせた後俺を挑発？してきた
まあでも既に知ってることだし
「だから何？」
「は？」
「え？」

ナルトとミズキの声が被る
「そんなこととっくに知ってるわ」
「何!?」
「それでも生まれた子供に責任はないだろ」
「黙れ!!」
そういってデカイ手裏剣を俺とナルトに向かって投げる
俺が止めようとした矢先
イルカ先生が体でとめた
俺が止めてたのに…　なんで犠牲に…
「なんで…」
そしてナルトに自分のことを話して
ナルトを助けようとした
「イルカもうやめとけ
さっきのあいつの目見たろ!?妖狐の目だ」
「ナルトは…　そんな奴じゃない」
「まっ!そんなのどうだっていい!お前とナルトとユウを殺すだけだ!」
簡単に殺せると思っているのがまずミスだよなー

まあガチでもコイツには負けないけど
「金剛封鎖」
「何っ!?」
ミズキを動けなくした
このあとはどうするか・・・
「ユウ・・・ そいつを外してくれ・・・」
ナルトがでてきて俺にそう言った
「無理はするなよ」
そういって金剛封鎖を緩めた
その瞬間に手裏剣を投げてきたが持ちろん弾き返す
「その隙があだとなるぞ!・死ねぇぇ!!」
「影分身の術!!」
「なっ!・なんだと!」
「「「はぁぁぁぁぁぁ!!!」」」
大量の影分身でボコボコにした
そうしてミズキを倒した
「へへ・・・ ちょっとやりすぎちゃった」

「ナルトちょっとこっちにこい
　お前に渡したいもんがある」
「先生まだ?」
「もういいぞ。卒業おめでとう
　今日は卒業祝いだラーメンをユウと一緒に奢ってやる!」
「イルカ先生ぇぇ!!」
　こうしてミズキ事件は幕を閉じた
　このことを水晶玉でみていた三代目様は
　これは微笑んでみていたそうな・・・
　ここから忍としての物語が始まる!

下忍試験！

アカデミーを卒業した後は班にわかれる
まあ消去法的に俺、サヤ、タクトなんだよなぁ…
実際そうなった。しかし、担当上忍は誰になるか…
「よう。まったか？」
その声は聞き覚えのあるものだった
声の主の方へ向く
「シスイさん!?」「お兄ちゃん!?」
俺の幻術の師匠であるシスイさんだった
「ま、そういうことだ。これからよろしくな！
今日から俺たちは第１３班だ！」
「「よろしくお願いします！」」
「じゃあまずは自己紹介からか！俺はうちはシスイ
好きな物は…訓練だな！」
「じゃあ俺から波風ユウ

好きなのは動物と訓練かな。将来の夢は父さんみたいな凄い忍になることです！」
「私はうちはサヤ
好きなのは饅頭と雪…あとお兄ちゃん
将来は…写輪眼と医療忍術を併用できる忍になれたらいいな…」
「俺は猿飛タクト！好きなのは肉と忍術！将来は色んなところを巡ることと爺ちゃんより強くなること！」
「そうか！お前たちは第１３班だといったがその前にやることがある！下忍になれるかどうか今から判断するぞ！」
「え!?卒業試験はなんだったんだよ!?」
「あれはアカデミーを卒業するためだけなんだよ
下忍になれるかどうかは別だ」
「試験内容はなんですか？」
そういうと鈴を２つ出して
「この鈴を俺からとったら勝ちだ」
「は!?２つしかねーじゃん！」
「さあいくぞ！試験開始！」

タクトをスルーして試験は始まった
「ねえ、ゆーくんこれって…」
サヤが尋ねてくる
「ああ。チームワークを確かめる試験だろうな」
「なら速くタクトくんにも教えないと！」
サヤはそういうが俺は一瞬考えて
「いや自分で気付くことが大切だ
俺らも最初は別々でいこう」
「わかった 」

「まずはユウか…」
「シスイ先生でも負けませんよ！」
「かかってこい！」
シスイさんには俺のほとんどの忍術を知られてる

それに対して幻術とかやられると流石にヤバい
しかし、写輪眼のやつは目の幻術がほとんどなので
合わせないようにする
「手裏剣影分身の術！」
「火遁豪火球の術！」
俺は後ろに背負ってる剣を抜刀し切りかかる
それに対抗してシスイさんもクナイで応戦
「やるな！」
「まだまだ！」
そうしてぶつかり合いが合った直後
「ユウ、あれは使わないのか？」
あれと言うのは飛雷神の術のこと
俺はあれ以来あの術を使ってこなかった
大蛇丸とかに気づかれないようにするためだ
「はい。ここぞにとっときます」
「本気でこないと勝てないぞ！火遁！豪龍火の術！」
「水遁！大瀑布の術！」

あたり一帯を水にしてから
「水剛封鎖！」
「くっ…！」
「俺の勝ちですよ。シスイ先生」
「油断したなユウ」
「!?」
目の前にはさっきとはちがう場所が映し出される
しまった！幻術か！
幻術解除しようとしているところに
「なにやってんだ！次は俺の番だ！
火遁！龍火の術！」
「遅い！」
「ちっ！くっそ！」
一瞬でシスイ先生はタクトを倒す
やっぱりそう簡単にはいかないよな
それからかなり時間がたち難度向かっても倒せないシスイ先生
そうしてタクトから話し掛けてきた

「ユウ、お前と俺、サヤが協力すればあの人だって倒せるんじゃねーか？」
　気付いたようだ
　そこで俺は話にのり
「俺もそう考えていた。サヤ！」
　アイコンタクトで意見を交換し
「いくぞ！」「おう！」

「おーきたな」
「いきますよシスイ先生」
　まず俺が手裏剣影分身で意識を分散させる
「そう何回も効くと思うなよ！」
　シスイ先生がもう見切ったと豪龍火の術で対抗する
　この時に隙が生まれる
「火遁！豪火球の術！」「火遁！炎弾！」
　二人が火遁を使って押す
「いい作戦だけどまだまだ！火遁！豪火球の術！」

まだ二人ではシスイ先生の豪火球には勝てない
だが、
「影分身の術!」
影分身で分身してから
「風遁!烈空掌!」
風遁を入れることで炎を強くする
「何!?」
一瞬焦りを見せたがすぐに立ち直しこのままでは不味いと瞬身の術で横に躱す
「そこだぁ!!水遁!水断波!」
影分身の俺がシスイ先生に向かって打つ
「っ!?」
本気で不味いと思ったのか写輪眼で見切って影分身と瞬身の術で逃げきられる
まさかこれまで交わされるとは…
ピーッ
終了の音が鳴り響く
「くっそーー!!」
タクトが悔しそうに叫ぶ

「よくやったぞお前ら合格だ」
「え、なんで？」
「この試験に必要だったのはチームワークだ
　お前たちにはそれができていた
　だから合格」
「そうだったのかぁ…」
「それにかなり危なかったぞ
　写輪眼まで使わされたし」
「えへへ！」
「じゃあ今から第１３班活動開始だ！」
「「はい！」」

勝負！・鬼人対コピー忍者！・＋α

下忍になった俺たちは普通に任務をこなしていた
動物を捕まえたり、自然の状況を確認したりした
俺はともかくタクトはそれだけでは足りなかったらしく
ナルトと同じように文句を言った
「ねぇ！もっとカッコいい任務やらせてよ！」
「まだ下忍なんだから仕方ないだろ」
「でもさ！俺めっちゃ強いんだぜ!?なぁ！シスイ先生！
」
「ははは。そうだな火影様に頼んでみるか！」
「マジ!?やった!!」
こうして三代目様にお願いしにきたらナルトたちもいた
「あれ？ユウか？なにしてんの？」
「こっちのセリフだぞ。ナルト」
「俺らは任務を貰いに来た！」

「なに!?俺らと同じか!」
　そんなこんなで三代目様がきて
「ならわかった。お前たち二班にCランク任務を与えよう」
　正史と違うパターンになりました…
　なんか俺らとナルトたちで行くらしい
　Cランクにそんな必要か??
　ただの護衛なのに…
　ナルトとサスケをまだ評価できてないのか?
「ちぇ!仕方ねーけどやってやるってばよ!」
「そして今回はシスイには別の任務にいってもらうためカカシに任せる」
「お願いしますカカシさん」
　シスイ先生がカカシさんにそういった
　なるほど…別の任務があるのか…
「それで誰の護衛に行くんですか?」
「なんだァ?超ガキばっかじゃねーか」
「はぁ!?」
「バカ。感情的になるな。こっちは依頼を受ける側なんだぞ」

「ほう。そこのガキはなかなかのようじゃな」
「それはどうも　」
「わしは橋作りの超名人タズナというもんじゃわい
　橋を作り終わるまで護衛をしてもらう！」

「さて出発しますか」
「まあ安心していいCランク任務で忍者対決はありえない」
「えー！つまんない！」
「それくらい当たり前なの」
　まあそんな話をしている時に後方から気配を感じる
　カカシさんも気づいたようで
「ユウ頼む」
「りょーかいです」
「え？」

　他の奴が何言ってるのかわからないみたいな顔をしている間に金剛封鎖で相手を拘束する
「な！なにっ!!」
「忍者?!」
「はい。拘束完了」
「くっ…」
「見たところ霧隠れの中忍ってとこか…
　こいつらはいかなる犠牲を払っても戦い続けることで知られる忍だ」
「なぜ我々の動きを見切れた」
「俺は実力もあるけど感知タイプでもあるんで」
　そう霧隠れの忍者にいう
「さて、タズナさん
　なんで黙ってたんですか?」
「…」
　黙られるの困るんだけどなぁ
「このままだとBランク以上の任務だ
　俺とコイツがいたから良かったですが今度はそう簡単にはいきませんよ?これだと

我々の任務外になりますね」
「は!?嫌だよ!まだユウしか活躍してねーじゃん!」
「お前なぁ…」
「俺は爺ちゃんを超えるんだ!こんなところで立ち止まってちゃいれねぇ!」
「俺もだ!火影になるまで失敗なんてしないってばよ!」
熱い意見を述べたあと俺がカカシさんに
「カカシさんが決めることです…」
といった
「はぁ…じゃあ任務続行しますか…」

そして船にのっている途中
「それにしてもやるなぁ!ユウ!」
「流石俺のライバル!」
「暑苦しいな…」
「実際凄かったのは事実だよ…?」
「ありがとうサヤ」

「なんでサヤのときは素直に感謝すんだよ！」
「いいから黙ってろ」
「まあユウはカカシ先生と兄さん、シスイさんに特訓してもらってるんだから当然だよな」
「えっ!?知らなかったんだけど！」
「言ってねーからな」
「今度俺も呼べよ！」
「はいはい…」
　そんな下らない話をしている間に波の国についた
「そこだぁ！」
　ついて直ぐにナルトが手裏剣を投げウサギにあたる
　まあこれのお陰でカカシさんは変わり身って気づけたからナルトまあまあいい行動だと思う
　そしてデッカイ刀が飛んでくる
「全員ふせろ！」
「へーこりゃ霧隠れの抜け忍桃地再不斬君じゃないですか」
　冗談めかした声だが実際は焦ってるだろうなー

まあ俺もなんですけど…
わかってるとはいえ気迫が…
「邪魔だ。下がっていろ
俺とユウ同時でやっと倒せる相手だ」
「写輪眼のカカシと見受ける
悪いが…じじいを渡してもらおうか」
「ナルト、サクラ、サスケ、サヤ、タクト、タズナさんを守れ。ユウ手伝ってくれ」
「了解」
「再不斬まずは俺たちと戦え」
「ほーー噂の写輪眼じゃないですか」
ここなら大蛇丸の監視はない
思いっきりやれる
というか手を抜いてかてる相手じゃない
「いくぞ」
「はい!」

戦闘自体は単純になると思った

カカシさんが再不斬の忍術をコピーして俺はそれの援護
水遁は俺の得意分野だし問題ないと思ったがどうやらそう簡単にはいかないらしい
「霧隠れの術」
「ちっ！」
視界が閉ざされてるがチャクラを感知して迎え撃とうとする。しかし、俺の剣術じゃ再不斬には勝てないので
それは諦める
「颶風水渦の術！」
本来ナルトとヤマトさんで行う技だけど風遁と水遁を両方持つ俺には1人で使えたこの術で霧を弾き飛ばす
「何!?」
「ナイスだ！雷切！」
雷切でやったかと思ったがそれは水分身だったということは…
「カカシさん！後ろ！」
「くっ…！」
今度はカカシ先生が弾き飛ばされる

「そのガキもやるようだな…だが甘い…」
再不斬が切りかかってきたので後ろにかけていた剣で応戦
「ほう…いい剣だな…俺の剣には敵わないが」
まさにその通りでこのままだと押し負けてしまう
だがまだ諦めない
「水遁・水龍弾の術！」
「ガキがここまで使えるとは…」
「火遁・豪火球の術！」
カカシさんと俺の同時攻撃に流石に不味いと思ったか
大瀑布の術を使ってきた
でもそれは予想通り
「水剛封鎖！」
大瀑布の水を利用して再不斬を拘束した
「チッ！」
変わり身の術で躱すがどちらが押しているかはハッキリしていた
「終わりだよ…」
「す、すげぇ…」

そこで仮面を被った白が出てくる
「すみません。この者は我が里の抜け忍」
そういって再不斬を仮死状態にする
これは予想だけど…たぶんあってる
「死んでいるかご確認ください」
そんなこといってたっけ？とか思いながらカカシさんが確認する
「ああ。死んでいる…」
そのとき俺も再不斬に触れてマーキングをつけさせてもらった。念の為にね
「では死体はもっていかせてもらいます
失礼しました」
「ふぅー！難去ったってとこだね」

チャクラって大事！

「カカシ先生…なんで倒れてんの…」
「写輪眼はめっちゃ体力使うの…」
「なぁーによ！写輪眼ってすごいけどそれじゃあ考えものね」
「でもま！今回あんなに強い忍者を倒したんじゃ
　しばらくは安心じゃろう」
「っていうかなんでカカシ先生が写輪眼使えるの？
　うちは一族の血継限界なんだぞ？あれ」
「まあ親友からの形見って感じだ…」
「取り敢えず寝たらどうです？」
「そうだな…ユウもチャクラをねっておけ」
「りょーかいっす」
　そうしてカカシさんは眠りに付いたがどうやら休憩はできないようでバンバン質問攻めがきた
「なんであんなに忍術使えんの!?アカデミーとかでは習ってないでしょ！」

「お前らもいくつかは使えるだろ…」
「アンナには使えないわ!」
「俺とサヤは豪火球、ウスラトンカチは影分身、タクトは龍火の術は使えるがお前の術とは正直レベルが違う」
「まあまあ特訓によるから…」
「またそれかよ!本当にずりーな!」
　まあ事実だしなぁ…
　そんな話をしていると急にカカシさんが目を覚ました
「おい…ユウ気づいてたか…?」
「どうしたんだってばよ先生?」
「ええ。多分色々と面倒なことになりましたね…」
　もう既に知っているがそういって話を合わせる
「何言ってるんだ?」
　みんなが思ってることを代弁してタクトがいう
「死体処理班ってのはその場で処理するもんなんだ…」
「それがなんなの?」
「あの仮面の少年は再不斬の死体をその場で処理はしなかった」

「それにあの少年の武器、あれは千本、主に医療用に使われるものだからね」
と俺が補足する
「つまり…？」
「再不斬は生きてるかもしれない…」
「えええええ!!」
「おそらく仮死状態にしただけなんだろうな…」
「ユウ…マーキングはできてるか…？」
「勿論」
「マーキング？」
今度もまた全員が疑問をもっていたがスルーして
「今からは流石に無理でしょうけどね…」
「…そうだな」
「取り敢えず休んでください」
「ああ…だがその前に…お前たちに修行を課す」
「そんなの無駄ですよ！」
サクラが反対するが他の奴らはワクワクしてた

そうして外の森にいきカカシさんは説明を始めた
まず始めにチャクラについて話し、そこから気を登れるようになれと命をくだした
「は?木登り?」
「そんなんで強くなれるのかってばよ!」
「まあまあただの木登りじゃねーよ」
「ユウ…頼む…」
さっきからカカシさん俺に頼ってばっかじゃね?
俺は正直疲れてチャクラも結構減っちゃったから休みたいんだけど…とか思っているとカカシさんがじーっと見てくるので仕方なく垂直に登った
で、また説明して始めた
まあやっぱり上手くはいかなくサヤには教えていたので多少は上手くいっているがナルト、サスケ、タクトは失敗してるねーというかナルトとサスケはともかくタクトもチャクラ多いんだなー
木が凄くえぐれてる
流石、猿飛一族

それから数日イナリの事情を聞き、それでもナルトは英雄がいると特訓を始めそれに感化され全員が死ぬ気で特訓をした
ナルトが1番成長が大きくやはり白にあっていた
そこでは何も手を出さないと思っていたので見逃した
「人は大切な何かを守りたいと思った時に本当に強くなれるもの」だとナルトに言って去った
できることなら救いたいんだが…
まあそれはあとで考えるとしよう…
そして7日目ついに全員登れるようになった
カカシさんの体もほぼ復活した
そして帰ってきたナルトはイナリにどうしてそんなに必死になるのかと泣きながら問い、ナルトは怒った

次の日…どうやらまた面倒なことになったらしい

ガトーの雇った忍が増えている
中忍レベルの忍と侍が１００人くらいといったところ
そこでカカシさんに言ったら
「お前に任せる…頼んだぞ」
「大丈夫なんですか?」
「ああ…アイツらは優秀だからな」
「了解しました」

そうして俺は敵地に1人でいる
もう再不斬と白は行ったようだった
「あァ!?なんだこのガキ!」
「殺しちまおうぜ!」
「黙っていろ」
２人だけで来たので蹴りで相手を倒す

「なんだ…このガキ…」
「全員でやるぞ！」
流石に全員で来てナルトたちを助けるためのチャクラを残すとなると腕が折れそうだがまあいける範囲
「水遁・大瀑布の術」
当たり一体を水にして相手の体制を崩してから攻撃を始める。まずは手裏剣影分身で相手を陽動する
そして剣を抜刀し瞬身の術を使って足等にダメージを与えて動けなくし拘束する
シスイさんに瞬身の術教えて貰っててよかった…
「水遁・水龍弾の術！」「風遁・大突破！」
後は影分身が暴れれば相手も疲労し効率もよくなる
かかった時間は…３０分ってとこか…
「く…くそ！なんなんだ貴様！」
「ただの忍だよ。黙ってここで捕まってろ」
そして俺はナルトたちの方へ向かった

英雄参上!

時は遡りユウと離れてから…
やはりナルトは遅れ、カカシ、サスケ、サクラ、サヤ、タクトで向かった
「来るぞ!」
かなり早く彼らは現れ、攻めてきた
「久しぶりだなカカシ。あのなかなかなガキは置いてきて雑魚ばかりか?可哀想に震えちまってるぞ」
「武者震いだよ!」
「やれサスケ」
そういったあと手裏剣を投げ、水分身を破壊する
「水分身を見切るとはなかなかだな」
「さて…サスケ、タクトあの仮面を頼む」
「了解!」
「サヤ、サクラ、タズナさんを守れ」

「あそこまでやるとは…」
「だがこっちは先手を打った上にあのガキがいない
どうせガトーの部下を相手してるんだろうが…取り敢えず運がいい。行け！」

サスケとタクトは火遁を中心に戦っていくタイプで
白は氷遁も含めて水遁に強い忍術を使える
２対１でもプラマイゼロくらいだろう
速さに特化したサスケと力に特化したタクト（ユウには及ばないが）
この２人のコンビネーションはなかなかのものだった

一方町では…
町の人が何人か殺され…ていたはずだったのだが
ユウが結界を貼っていたので誰も死にはしなかった
だが、人質には取られてしまう…
間違ってイナリが結界から出てしまったから
代わりに人質になってしまった

「僕のせいだ…僕が出たから…ごめんよ…母ちゃん…」
イナリの中でナルトとカカシとカイザの言葉が渦巻く
そして決心がつく
「やめろ!かっ、母ちゃんから離れろ!!」
「イナリ!危ない!」
侍が斬りかかったが実際に切ったのは木だった
変わり身の術をナルトがしたのだ
「遅くなって悪かったな…ヒーローってのは遅れて登場するもんだからよ…よくやったな!」
そして影分身で侍を一掃
取り敢えずの安全を作り出した
そしてナルトはイナリに近づき泣き虫呼ばわりして悪かったと謝ってから家族を守ったイナリを褒めた
「お前は強えーよ!」
彼は嬉しいときには泣いていいといってイナリに任せた
そして後に英雄となる少年は仲間の元へと向かった

戻って大橋…
サスケとタクトは白に対して対等以上に戦えていた
もちろん白はまだ氷遁を使ってはないが…
スピードは見切りタイミングを合わせた攻撃を守り、反撃に転じられなくなっていた
「どうやらスピードは俺の方が上みたいだな」
「威力は俺の方が高い！」
「ガキと舐めてもらっちゃ困るねぇ…
サスケとタクトそしてサヤは未来有望なビッグルーキーだし、ここにいるサクラは里一番の切れ者…もう1人は意外性Ｎｏ．１忍者、最後の1人は既に上忍レベルの最強下忍たちだからな」
「流石に本気を出さないとまずいと思うぞ白?」
「ええ…残念です
秘術・魔鏡氷晶!!」
一帯が氷に包まれサスケとタクトが使って捕まる

そのスピードは今間でと比にならないほど早くサスケもタクトも削られていった
「くっそ！サスケェ！」
「ああ！」
「火遁・豪火球の術！」「火遁・龍火の術！」
２人で火遁を打つも溶かせない
だがそこに現れたのが…
「うずまきナルト！ただいま見参！」
「意外性Ｎｏ．１忍者…！」
「いくってばよ！」
ナルトが影分身でいくら攻撃しても炎を使っても無駄だった
「これは血継限界…!?」
写輪眼や白眼と同じ血継限界
血継限界の強さを改めて思い知った三人…
だが１人たりとも諦めなかった

そしてついにサスケが写輪眼を使ってなんとか見切れた
その流れに乗りサスケの指示で２人が動く

「タクト！ナルト！」
　タイミングを測ってついに一撃を喰らわせた
「くっ！」
「まだだ！いけ！」
「多重影分身の術!!うずまきナルト連弾!!」

「サスケとナルトとタクトは普通の忍とは違う…
　意外性Ｎｏ．１忍者と火影の孫、そして血継限界の天才忍者
　コイツらは強い…！」
　かなりのダメージを喰らった白
　そして暗部の仮面も外れ
　その顔が明らかになった
　その顔を見てナルトの動きが鈍くなり一瞬で逃げられた…
「何やってんだよ！ウスラトンカチ！」
「あん時の…」
「正直今のは危なかったです…でも終わりです…」
「それはどうかな？」

「……ハァ…やっときたね…」
カカシが安心したように息を吐く
「ヒーローっていうのは遅れてやって来るもんなんだろ?」

閃光の息子ＶＳ氷遁の子

「チッ…これじゃ分が悪いな…いけるか？白」
「再不斬さん…僕を舐めないでください」
どうやら舐められてるのは俺の方らしい
まだ本当の実力を発揮してもないのに
「さあいくぞ」
俺はナルトたちを分身を使って飛雷神で氷の外に飛ばす
突然氷の外に行ったことと突然現れたことに今更驚く２人
その一瞬の隙を狙い手裏剣影分身で氷ごとにマーキングをつけた手裏剣を刺す
白が素早く攻撃してくるタイミングで飛雷神を使って避ける。それを連続させチャクラ切れを狙うのが最初の作戦だったのだがどうやらそれではいけないらしい
ちなみに飛雷神を使っても氷だと速さが間に合わない
白にマーキングをつけないと…
再不斬がナルトたちを狙い始めたのだ
流石にそれじゃチャクラ切れが間に合わない

自分のチャクラをかなり消費するがやるしかない
「どうやら再不斬さんが王手を掛けたようですね…
では終わらせましょう…」
「こっちのセリフだ！水遁・多重水牢の術!!」
水牢の術の強化系の俺オリジナルの術
何重にも水牢を重ね相手を逃がさないようにする術だ
普通は…
今回は白が攻撃してきた瞬間に水牢を使い自分を守る
１つ目の外側の水牢に当たった時白は氷遁を使って水を凍らせ攻撃を続けてくる
しかし２つ目の水牢に突撃することで突撃の速さが遅くなる
その瞬間に白の背中辺りに攻撃を与える
これでほぼほぼいける
「今の技は流石に驚きました…でも今の技で僕を倒せなかったのが運の尽きですよ…再不斬さんに得意の剣を刃こぼれさせられたのも大きいでしょうが…」
「心配は必要ねーよ…お前はもう敗北が決まった…」
「よく減らず口が叩けますね…」
「いくら血継限界のお前でも俺の速さには勝てない…」

「僕は忍を含めてもの中でもトップレベルの速さの自信はありますよ…？」
「なら確かめてみ…な！」
俺は白の後ろに飛雷神で飛び蹴りを入れる
「…なっ…!?」
白ｓｉｄｅ
全く見えなかった…
あの子供たちを移動させたのと同じ術か！
でもどうゆう原理なんだ…？
そんな術きいたことも…
いや…まさか…飛雷神の術!?
あの２代目火影と４代目火影しか使えなかったというあの忍術…!?
でもそれしか考えられない…！
Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ
「その術…飛雷神の術ですね…」
「知ってたのか…」
「ええ…有名ですからね…あの忍最速を誇る忍
４代目火影波風ミナトの得意術だったそうですしね…」

父親の名前を聞き、本当に凄い忍だったんだなぁ…
と思いつつ油断はしない
「そうか…まあもう終わりは確定した…御託をしている間にな…」
「何…っ!?」
白は俺の金剛封鎖で拘束した
俺の影分身が白のマーキングに金剛封鎖を転送した
飛雷神の応用術（飛雷神・烈雷）だ
「悪いな…隙を作るためにわざと話させて貰ったよ…」
「くっ…!」
「王手だな…」
そうして俺と白の戦いは俺の勝利となった

協力戦線！木の葉と霧！

「…まさか白がやられるとはな…」
「これで一安心だね…こっちも終わらせるとしよう…」
再不斬とカカシが同時に印を組む
「火遁・豪龍火の術！」
「水遁・水龍弾の術！」

「雷遁・雷獣追牙！」
「水遁・大瀑布の術！」
何度も忍術を使い、相殺されそれをまた続ける
その忍術合戦に痺れを切らし再不斬が切りかってきた
そのタイミングを好機だと見出しカカシは雷切を構える
しかし再不斬も1度見た雷切を見切りカカシの雷切が当たる瞬間に水分身で変わり身を使う
カカシはそこまで読み切っていて雷切の用意をさせるのを影分身にし、影分身がやら

れたところで写輪眼で幻術をかけ、動きを封じる
「これで終わりだ…雷切！」

「……再不斬さん…!?」
再不斬の危険を察知し、抜け出そうと試みる
だが、それを分かっているユウは縛りをキツくし逃げられなくする。そしてある提案をする
「なぁ…良かったら提案がある」
「……なんですか…」
自分の大切な再不斬がやられそうなのだ
どんな提案でも聞くべきだと思った白は話を聞く
「今カカシさんと再不斬が戦ってカカシさんが優勢だ
だが、それでもかなりチャクラを使っている
それは俺もだ」
「そうですね…」
何が言いたいか理解できなかった白はよりユウの話に耳を傾ける

「今チャクラを感知すると３００人くらいの忍のチャクラが感じられる。恐らくガトーだ。まとめてやるつもりだと思う。そこで再不斬を殺さない代わりにアイツらの契約を切って一緒に戦って欲しい」
「…僕の身柄を拉致するとかではないんですか…?」
　血継限界は他里が欲しがるもの
　自分の身柄をとられることを想定していた恥ずかした白はそれを聞く
「そのつもりはない。協力して倒したら後は好きにしてもらっていい」
「…わかりました」
　もともと今拘束され再不斬が殺されそうな時話を信じる信じないの問題ではなかった
「ありがとう。じゃあまず再不斬を助けてくる」
　そういうと飛雷神の術で再不斬に付けていたマーキングへ飛び金剛封鎖でカカシの左手を封じる
「なっ…!?何をする！ユウ!?」
「カカシさん落ち着いてください
　チャクラを感知してみてください。３００人程度の敵が確認できます。俺とカカシさんでも流石に不可能です

今、拘束していた少年と契約しました
とりあえずガトーをぶっ潰します。後はそれからです」
ユウの話を聞きしばらく黙ったあと納得したように
「はぁ…仕方ないね…」
と言い、再不斬に声をかける
「そういうことだって。手伝ってもらえる？」
「ああ…仕方ないな…」

「再不斬ぁ！所詮お前は小鬼だったということだ！なんだそのザマは！そのまま死ねぇ！」
ユウは何かに気づき後ろを振り返り声をかける
「シスイ先生…いるなら手伝って下さいよ…」

「よく気づいたな…」
「シスイ先生!?」「お兄ちゃん!?」
タクトとサヤが驚く
「任務はどうしたんですか?」
「終わらせてきたよ。余りにも帰りが遅かったから来てみたら…まさかの忍刀七人衆とはね」
「もっと早く助けてくださいよ…」
「今来たばっかなんだって! 悪かったな。ここからは助太刀するぜ」
「当たり前です!」
そんな減らず口を叩き合いその後シスイがカカシに声をかける
「すみませんね。わざわざコイツらの面倒見てもらって」
「いやお陰で実力が分かったから大丈夫だ」
「そう言ってもらえると助かります」
「さあ! 行きますよ!」
ユウの声に合わせ敵に突っ込んでいく
戦闘は一方的でユウが大瀑布で辺り一体を水にして白がそれを凍らせて相手の動きを封じ、シスイと再不斬とカカシで止めを刺す

そして一瞬で壊滅した
「す、すげぇ…」

「いやー助かったよ再不斬」
「それはこっちも同じだ。癪だが今回は見逃してやる」
「それはこっちのセリフだから」

「白の兄ちゃん…」
「あなたはもっと強くなります。いつかまた会いましょう」
「ああ!次に会う時は火影になってるってばよ!」

「よしよし。一件落着!」

「シスイ先生遅すぎんだよ！」
「すまないな。別の任務も早く終わらせた方なんだが…」
「先生は瞬身のシスイなんだからもっと早く終わらせてこいよな！」
「ははは。面目ない」

そんな会話をして再不斬と別れ波の国の任務は終了した

報告と特訓

木の葉に帰ってきたあとカカシが火影室に報告に来ていた
「よくやってこれたのぉ…カカシ…」
「流石にかなり手こずりました…3代目…貴方は依頼が違う内容だと気づいていたんじゃないですか?」
「うむ…ガトーまではなんとか考えていた…流石に再不斬は予想外だったが…本当に済まなかった…」
「顔をあげてください…危険だと思ったからユウを一緒にいかせたんですよね…?」
「ああ…あの子なら子供たちを守ることができると思ったからな…」
「本当にいてくれて助かりました」
「本当に優秀な子じゃ…」
「次の中忍試験で確実に中忍に上がると思われます」
「そうじゃな…一方的な試合になってしまうじゃろう…」
「でもユウには列記とした弱点があります…それを気にしないほどの実力ですが…」
「そうじゃな…シスイに中忍試験のことを聞いておこう…」

「ではこれで失礼します…」

「あの子はナルトの真実を知っておる…木の葉に絶望して里抜けされることはないと思うが…それでも多少の注意は必要じゃろう…だがそれ以上に心配なのはタクトじゃな…変わってなければいいんだが…」

場所は変わりシスイ部隊

「お前ら中忍試験どうする?」

やっときたなぁ…俺が中忍試験にでてごちゃごちゃにならないといいんだけど…ま、いいや

我愛羅とかもいるし…問題は大蛇丸…正史ではサスケを狙ったけど今回は写輪眼をもってるサチとかつての師匠の孫と火影の息子（俺）がいる…常識的にこっちを狙ってくるだろう…うちは一族単体が狙われる場合はフガクさんとイタチさんがいるからいいんだが…

「もちろん出るぜ！早く中忍になる！」

「わ、私も…」

なんか勝手に話が進んでいたようで後は俺が言うだけらしい

「俺も出ます」

「よし！じゃあ決定だな！」

もっと訓練を付けておくか…新しい性質変化使えればいいんだけど…流石に無理だろうし…自来也さんに会いに行って特訓するのが早いか？でもナルトの面倒みてくれるしそれはなぁ…そんなことを考えてると

「じゃあ俺はサチとタクトに訓練をつける。キツイから覚悟しとけよ！」

俺と一緒にやると色々とやばくなるから空気を読んで退出

さて誰に教わろうかなぁ…カカシさんは忙しいし…
というか木の葉にいる上忍大体忙しいからなぁ…
自己訓練するか…そう思っていつもの森へいくと
「イタチさん！どうしてここに？」
「サスケはカカシさんがやるそうだ。あとシスイから訓練をつけるように頼まれていてな」
シスイさんありがとうございます！
これなら効率よくできる！
「まあ水遁と風遁と陰陽遁でもうお前に教えることは無い。実戦形式でいくぞ」
「はい！わかりました！」
そうして忍組手が始まった
イタチさんの写輪眼で読まれるから難しいんだよなぁ
「水遁・波琉撃！」
「ほう…新しい術か…」
この術はあの鬼鮫の術吸収する術をイメージして作った
まだ試作の段階だから上手くはいかないかもしれないけど
「火遁・豪龍火の術！」

火遁で相殺しにくる。だがそれはわかっている
また新しい術を使う
「封火法印！」
実際は巻物とかに吸収する技だが俺の場合は飛雷神の口寄せ印と金剛封鎖を使って
その1点に集中させ封じる
「ほう…やるな…」
そのまま波琉撃が直撃した。だけどこれでやれるはずもなく
「くっ！鳥分身…!?」
鳥が飛び回り俺の周囲に集中する
そして一瞬で俺の首元に刀を当てる
「暗殺術…！」
「まだ甘いな…」
そういって刀を下ろす
「もう少し対処できるようにしろ」
そういって1回目の訓練は終わった

第1の試験

まあ色々ありまして中忍試験の志願をしに学校に来ました
まあまあ揉め事が発生してたけどそれはスルー
サスケもわざわざ相手になんかするかとナルトたちをさっさと行くぞって言ってたけど邪魔され敵の蹴りをリーが止める
「お前約束が違うじゃないか」
まあそんなこんなでサクラにリーが告白する
そして振られてネジが俺の方に近づいてくる
あれ？おかしいなサスケじゃなかったっけ??
「お前名乗れ」
ネジからそう言われて普段なら教えるんだけどここはサスケの真似して
「人に名を聞くときは自分から名乗るもんだぜ」
キャラじゃないこと言ったなと思うよ自分でも
そしてですね。勝負を挑むわけなんですよリーくんが
でもまたしても相手が違くてね？あの俺だったんすよ

なんなの!?何故こうなる！目立ちたくないのに…
面倒臭いので
「お前と勝負してなんになる」
「僕の実力を知ることができます。あの四代目火影の息子の実力確かめたい」
ダルいけどせっかくなのでお受けすることにした
勿論飛雷神はなしで、でも負ける訳にはいかないんですね
「僕はロック・リー、あなたに勝ちます！」
「はぁ…じゃあこっちも波風ユウ、そのままそっくりお返しする」
「ユウくん…残り３０分だけど大丈夫…？」
「大丈夫だよサヤ、すぐに終わらせる」
フラグじゃないしカッコつけてもないからね？別にサスケの真似ばっかしてるわけでもないし
そんなこと考えてるとリーから動いてきた
「木ノ葉旋風!!」
確かに結構早いけど飛雷神が使える俺にとってはまだまだ遅いね。すげー上から目線だけど
必要最低限の動きで躱す

「な、なにっ!!」
　リーだけではなくネジまでもがおどろいていた
「次はこっちから行くぞ」
　体を捻らせ後ろ蹴りをかます
　すぐに水剛封鎖で動きを封じる
「くっ・・!!」
「さて勝負はこれでいいか?」
「まだだ・・!!」
　ここで諦めないのは素直に凄いと思う
　だけどそろそろくるはず
「そこまでだ!」
　でた〜亀!!
「が、ガイ先生!!」
「リーそこまでにしておけ!」
「くっ…でも!!」
「もう時間もない!今回は一旦下がれ!次勝てばいい!」
「が、ガイ先生〜」

そうして抱き合って泣く
ガイ先生本当にカッコイイよな…
他の人引いてるけど…
「すまんな…ユウ…今回は俺の顔に免じて許してやってくれ…」
今更ですが、なんか四代目火影の息子ってこととシスイさんを救ったってことで上忍にも多少は顔がききます
「いえ、大丈夫です」
「じゃ頑張れよリー！」
「押忍！」
そう言って消えましたね
「あ、アイツすげぇ…」
なんか周りで噂もされてるし…これだから目立ちたくないよなぁ…カブトとかいるかもしれないしさ…

「よ！ちゃんと来たな！」
「シスイ先生！」

「じゃあお前ら3人1組で全員活躍してこい！」
「「はい!!!」」

試験会場はまあまあピリ着いた雰囲気
俺はカブトにだけ睨んで席に座った
そしたらナルトが叫ぶ
「オレの名はうずまきナルトだ!!てめーらには負けねーぞ!!わかったかー!!」
少しくらいピリピリしたのが下がったかも…

そしたら音の忍がナルトたちの方まあカブトの方に向かって攻撃する。もし万が一ナルトたちになにかあると面倒臭いので一応俺が行き、拘束する
本当に便利な術だね
「静かにしやがれどぐされヤローどもが!!」
そーしてイブキさんと試験官が現れる
軽い自己紹介と音隠れの忍と俺に注意して説明を始めた
まあみんな色々なことしてビビると
うちの班はいけると思う。タクトあんなんだけど頭はいい
「よし…始めろ!」
問題は超難しい
まあ一応俺は解けたんだけど
普通の人がわかるレベルじゃない
そして４５分経過
「別なルールを追加する。これは絶望的なルールだ」
ここでのルール追加
流石に絶望的ともとれるがこれ知ってるからなぁ…
次々と脱落する忍

そしてナルトが…

「なめんじゃねー!!オレは逃げねーぞ!!受けてやる!もし一生下忍になったって意地でも火影になってやるから別にいいってばよ!!怖くなんてねーぞ!!」

言った～これ普通に凄い。この緊張感でいくとは流石

そして残った７８人が合格を言い渡された

まあみんな文句言ってたけど理解してたからねー

アンコさんがでてきて出るように言った

第２の試験開始！大蛇丸対ユウ！

またしても説明が入りサインを書かされた
俺らのゲートは２１
「これより第２の試験開始!!」
「よっしゃ！いくぜ!!」
「落ち着けよタクト」
ちなみに俺らの巻物は天の書でした

森の中を進んでくと変な気配がした
「さっさと終わらせちまおーぜ」
「そーだな。そこにいる奴倒して終わらせよう」
「!?」
「気づいてないとでも思ってるのか？」
「ふふふ…バレちゃったのなら仕方ないわね…」
でましたね…大蛇丸…それにしてもどうしようか…

本当にこいつが1番やばい…
はったりきかないよ…
「早速だな！やろーぜ！」
そーいうと大蛇丸が殺気で抑えてくる
「な、なんだこれ…」
「落ち着けよタクト…」
「ユウくん…」
「サヤ…コイツはやばい…俺一人でやっても無理かもしれない…タクトと援護頼む…」
「う、うん！」
そんな話をして俺は早速逆に殺気をかえす
「あら…やるわね…流石四代目火影の息子…」
「黙れ…」
一定の距離を取り、攻撃を始める
「だけど私が用があるのはそちらのお嬢さんの方だから…あなたにはやられてもらうわ…」
「そう簡単にやられるかよ…水遁・大瀑布の術！」
絶対にサヤに呪印をやられるわけにはいかない…命をかけてでも止める…！

辺り一体を水にする
「流石ね…上忍レベルの忍術を使えるなんて…」
「伝説の三忍に言われるのは素直に褒め言葉だぜ？」
その時、大蛇丸は初めて驚いた表情を見せた
「…どうしてそれを…？」
「知らないわけないだろ…俺はアンタと同じくらい術の研究をしていたんだから…な!!」
一瞬生まれた隙を使い森に隠れていた影分身で攻撃を当てる。だが流石にすぐに受け流される。だが命中はしたそこに飛雷神の印を付ける
これで決める
「猿飛先生でも知らないことによく気づいたわね…」
「文献に残っていたよ…転生忍術を研究して木の葉から抜けた伝説の三忍大蛇丸…蛇を口寄せする忍はほぼいない…そしてこの殺気…アンタしかいないだろ…」
いやかっこいいこと言ってるつもりだけど実際知ってるからなぁ…これだけじゃ判断材料が足りなくて普通だったら動けんよ…
そう言うと次は笑い始め
「その通りよ。本当はうちはの子にするつもりだったけどあなたもいいわねぇ…」

「何するのかしらねーけどサヤも俺もお前なんかに関わりたくねーよ！」
大蛇丸につけた印まで飛雷神で飛び一瞬で抜刀して切り替かる。これで仕留めたと思った…だが
「飛雷神の術…もう生きてる忍であなたしか使えない術ね…この歳で使えるとは…」
本当に驚いた…絶対に決めたと思ったのに…
「驚いているみたいね…この情報は正直宛にならないと思ったのだけど…雰囲気を見て確信したってところかしら…」
「…まさか…！」
ダンゾウ…！あの時のダンゾウから情報を得たのか…！
甘かった…協力関係にあったことは知っていたのに…！
「これで終わりね」
蛇の口から草薙の剣を出して切りかかる
もうこれなら仕方ない…本当にチャクラ切れを起こして気絶するが…サヤを渡す訳にはいかない
俺はタクトとサヤにアイコンタクトして2人は術を使う
「火遁・豪火球の術！」「火遁・豪龍火の術！」
「その程度の攻撃甘いわね…」

その一瞬で勝負を決める
飛雷神でタクトの方に飛び分身はサヤの方に飛んで
分身が水剛封鎖でサヤとタクトの火遁にぶつけて蒸発し、霧ができる。そして分身にタクトとサヤを遠くに離させて準備管理
「これで終わらせる…！」
「この強大なチャクラはなに…!?」
「はぁぁぁぁ!!金剛鎖結界!!」
無限に出続ける金剛封鎖が柱状に天高く伸びる
外部からも内部からもダメージを無効化する
最強結界、俺がこれを使って持つのは3分だけ
それでも今はこれをするべきだった。これならアイツらを逃がすことは出来る…そしてここの金剛封鎖には全部飛雷神の印が組み込まれてる。ここなら実質俺の独壇場
「この結界…本当に恐ろしい子ね…」
大蛇丸の発言を無視して攻撃にでる何せ時間がない
飛雷神と金剛封鎖を駆使して攻撃していく
この状態ならギリギリ五分五分にもってけるかと思ったが無理だった…これでも俺は押されていた

「そろそろチャクラ切れかしら…でも頑張った方よ…本当に興味が湧いてきた…」
「黙れ!!」
チャクラがすぐ切れるのが問題
だが大蛇を口寄せしても金剛封鎖で身動きがとれないのでそこは上手くいった。もう残り1分俺が大蛇丸対策に作ったこの術で終わらせる
影分身して分身に相手させ、俺は印を組む
残り最後の印のときに…丁度チャクラ切れ…
何故!?
そうか…影分身…こんな初歩的なミスを…ダメだ…意識が…

そうしてユウは倒れた。それと同時に結界も解除され大蛇丸が近づいてくる
「ふふふ。うちはの子は残念だったけどそれよりいいかもしれないわね…」
そういって近づいてく

だが大蛇丸が触れる前に倒れたユウを持って遠くに運んだ

大蛇丸を止めろ！

「お前がユウをやったのか…！」
「ふふふ…まさか戻ってくるなんてね…馬鹿な子だわ…」
助けたのはタクトだった。ユウのチャクラが弱まってるのを感じてサヤと一緒に戻ってきた。それも凄いスピードで来た。普通のスピードではない
「サヤ！ユウを回復させてくれ！」
「わかった！」
そう言ってサヤは医療忍術を使ってユウを回復し始めた
「させるわけないわよ…」
大蛇丸はそんなことさせまいと首を伸ばして噛み付こうとする。だがそれは防がれた
「火遁・烈火弾！」
こいつには本気を出さないと不味いと思ったタクトはいきなりユウと戦う時に用意してた術を使った
少ない印と高度なチャクラコントロールによって使えるタクトのオリジナル技、イ

メージ的には千鳥鋭槍に近く炎が手から放たれ相手を燃やす
波の国に行ってた時から考えていてシスイの協力によって使えるようにはなった。まだ未完成だが…
その攻撃の破壊力は抜群で1発で大蛇丸を吹き飛ばした
「ぐっ…ユウくんといい…このチームは恐ろしいはね…」
笑みを浮かべながら嬉しそうに発する大蛇丸
「気持ち悪いヤローだな!さっさと倒してやる!」
大蛇丸に若干引きながらもう一度烈火弾を構える
「流石にもう一度くらうわけにはいかないわよ…」
烈火弾を変わり身で躱し、潜衛蛇手でタクトを攻撃する
「っ…!!」
腕を微かに掠り、少し血が流れる
「これを避けるとはね…本当に面白い子達ばかりだわ…」
いくら大蛇丸がユウとの戦いで消耗してるとはいえ、タクトだけでは流石に辛い状況だった
だがそれはタクトの思い違いで大蛇丸はタクトが思ってるよりずっと消耗していた
五分五分までとはいかなくてもかなり善戦し、体力をかなり削っていた

不味いと思ってるのは大蛇丸もで、タイミングを見計らい、呪印を施して消えようと作戦を練っていた

先に動いたのはタクト、素早く印を結び烈火弾を打つ
大蛇丸はそれを利用しさっきとほぼ同じように躱して
潜衛蛇手で攻撃する
それに気づいて今度こそ当たらないように変わり身で躱す
だが、それはトラップで大蛇丸は呪印を施すために首を伸ばしてユウとサヤの方に急速に近づく
「っ!?不味い!?」
医療忍術に集中してるサヤと気絶してるユウ
絶好の的ではあった
「させるかぁぁぁ!!」
タクトはまたしても恐ろしい速さでユウたちの方に行き、２人を庇って噛まれた
「ぐっ…!!」
タクトに呪印が付けられた
「タクトくん…!?」

呪印を付けた数秒後大蛇丸は急に真顔になり不思議そうにタクトを見た
「この子…まさか…」
呪印を付けられたがまだタクトは苦しみながらも立っていた
「お前になんかコイツらに触れさせねェよ…!」

「痛っ…」
そのタイミング丁度にユウが目を覚ましたのだ
ユウは怪我してるタクトを見て体を起こし、思考をフル回転させ大蛇丸にやられたと気付いた
「大蛇丸ッ…!貴様…!」
すぐ様印を組み金剛封鎖を発動させ攻撃を仕掛ける
大蛇丸は楽々と躱してユウに告げる
「ふふふ…どうやら目覚めちゃったようね…でも面白いことが分かったから、今回は引かせてもらうわ…これはプレゼントよ…」
そう言って地の書を投げて地面に落ち、別の印を組む
その印は幻術の解印に酷似していた
「ぐっ…!?あ”ぁ”…!?!」

「タクト!?おい!?」
その印を組み終わるとタクトが急に頭を抱え苦しだし、倒れた
「何をした…!?」
すぐに大蛇丸のせいだと思い訪ねる
だがその問いに大蛇丸は
「さぁね…これは里のに聞いた方が良いわよ…」
とだけ言って消えた
勿論追撃を狙ったが回復が完全ではなく体が動かなかった
「くそッ…!!」
少し悔やんだ後そんなことしてる場合ではないとサヤにタクトの治療を頼んだ

なんとかクリア！第２の試験！

流石にこれは不味い…巻物は手に入った…今すぐ脱出する…まだ完全にチャクラが戻った訳では無いが…これくらいなら大丈夫だと思う…

そう言って金剛封鎖の印を組み森にそって進んでいく

出口にでたらそこに飛雷神で飛ぶ

「サヤ…タクトの状態は大丈夫か…？」

「うん…少しの傷はあったけど命に別状はないみたい…」

「よかった…悪いな…タクト…無理させちまって…」

だが急に苦しみ出した理由がわからない。呪印のせいかもしれないが…あとはあの幻術の解印に近いあの印…あれはなんだったんだ…？

そんなことを考えてると金剛封鎖が外にまで行ったことに気づきタクトに触れてもう片方の手でサヤの肩に触れる

「飛雷神で飛ぶ、一旦クリアするよ」

そういって出口まで飛んだ

タクトをおんぶしながらドアを開け中に入る
「誰もいないか…」
「アレの通りにすればいいのかな…?」
「恐らくね…サヤ同時に開けよう…」
「わかった…せーの…」
そうして開けると口寄せの術式が発動した
そしてそこから誰かがでてきた
「イルカ先生!」
「よっ!久しぶりだな…って…お、おい!タクト!大丈夫か!?」
イルカ先生は急いでタクトに近寄りこっちにどうしたんだ?と言うような顔を向けてきた
「その件についてちょっと3代目様と話したいんですけど…」
「済まない…火影様は今仕事が凄い量あって来れない可能性が高い…シスイは読んでおくか?」
「お願いします…」
そうして俺とタクトの回復をしながらシスイさんを待った
そして思ったより早く来た

「どうしたんだ？ユウ」
　倒れてるタクトを見て俺に訪ねてくる。焦らないあたり流石だなぁと思う
「試験会場に大蛇丸がいました…それで俺がやられて…2人が助けてくれたんですが…タクトは呪印を付けられてしまって…」
「そうだったのか…」
「俺なら呪印を消せるんですけど…チャクラが足りなくて…」
「いやとりあえずは俺がやろう…封邪法印！」
　そういってタクトの体に触れて呪印の力を抑える
「これでとりあえずは大丈夫だろう」
「ありがとうございます！シスイさん！」
「いやいい。それより大蛇丸だ。飛雷神の印は付けてるか？」
「はい」
「それならイタチとを呼んで俺らも行く。試験会場にまだ居るとなると流石に危険だ」
　そういって影分身をしてそれぞれが別の方向に行く
「悪いな。とりあえずあとはイルカさんに任せる」
　そういって黙って聞いてたイルカ先生がまた前に来て
「この空気で言うのもなんか辛いがじゃあまず第2の試験の達成おめでとう。それじゃ

あこの壁紙の説明をする。これには火影様が記した中忍の心得だ。この文章の天は頭をさし、地とは体を指している。この文章には天地両方を兼ね備えればどんなことでも出来るということが書かれている。だから空いているところにはこの人という字が入るんだ。お前たちは中忍としての基本能力があるということだ!この心得を忘れず次のステップに行って欲しい」

「了解です!!!」

　その話を聞いているとイタチさんが来た
「大蛇丸が出たというのは本当か?」
　そうイタチさんに聞かれる
「はい。タクトにも呪印をやられました」
「なるほど。じゃあユウ、お前は影分身して俺たちと大蛇丸を広い場所に連れてきてくれ。そしたら休んでていい」
　とイタチさんに言われたが仲間をやられて黙ってなんていれない
「いや!俺も戦います!」

だがそれは止められた
「その体では無理だ。いくらお前が上忍クラスと言っても相手はあの大蛇丸だ。少し休んでおけ」
そう押されて頷くしかできなかった
「じゃあ頼む」
「…はい」
そういって影分身をして飛雷神を使い大蛇丸の所まで飛んだ。案の定大蛇丸はナルトたちの方にいたが俺がすぐに気づかないレベルで飛ばした
それと同時に3人を大きな平地に飛ばした
そして命令通りに俺はタクトたちがいるところへ戻った

「っ…!?」

大蛇丸　Ｓｉｄｅ

どこだ！ここは！私は今度こそ写輪眼を狙いサスケくんを相手していたのに…これは…まさか飛雷神…また戦う気？あの体で？

そう思った矢先にあのうちはイタチとうちはシスイが現れた

ふふふ…なるほど…そういうことね…流石にこれは不味いわね…

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「お前が大蛇丸か…」

「えぇ…そうよ…お会いできて光栄ね…うちはイタチ…うちはシスイ…」

シスイ　Ｓｉｄｅ

「お前に興味など無いが大事な弟子を傷つけた罰は受けてもらう」

そうイタチがいう。やっぱりユウのこと大切に思ってるんだなと思いながらも大蛇丸を睨みつける

コイツがタクトに呪印をやりやがったのか…！

「ふふふ…貴方の写輪眼もいいわね…サスケくんよりいいわ…」
次はサスケまで狙おうとしてたのか…！サヤもユウもサスケも狙われるなんて…許さねぇ…
「許さねぇぞ…大蛇丸…！」
そういって印を組む
「火遁・鳳仙花の術！」
火の玉が爆発し大蛇丸に当たるが変わり身で避けられる
「落ち着け…シスイ…」
イタチもそう言ってるがサスケのことを聞き更に目は本気で大蛇丸を睨みつけ印を組んでいる
「いくぞシスイ」
「ああ！」
２人で印を組む。大蛇丸に印を組ませる隙を作らないまま攻撃する
「火遁・烈火弾!!」
俺とタクトが開発した技。絶対にアイツを潰す！
「それは流石に不味いわね…」
そういって逃げようとする大蛇丸だが

「誰が逃がすか、うちは火炎陣」
イタチが結界をはる
そして大蛇丸に直撃
「ぐっ…！タクトくんのより痛いわね…」
そんなことを言う隙すら与えない
「瞬幻・火炎斬り」　「火遁・火龍炎弾！」
火の玉の間からイタチが斬り掛かる
次は変わり身で躱されてしまった
「流石に分が悪すぎるわ…でも…運も良かったみたいね…」
何を言っている？と思うと結界外から手裏剣が飛んできた
「じゃあ失礼するわ…」
「まて！！」
その隙に大蛇丸が大蛇を口寄せして体内に入り結界外まで行ってしまった…一体誰が…
「まだだ。すぐにユウのところに戻るぞ」
「ああ…」
そうしてまたユウのところに行った

Side end

休息、シスイさんの家で

俺たちは2番目に早く終了したので休む時間があった
まだ全然回復してないチャクラを戻すために休息していた
タクトはまだ目を覚まさない
今は医療上忍の方が治療してくださっている
それで時間を持て余していたらシスイさんに誘われ初めてシスイさんの家に行かせて貰った

「お、お邪魔します…」
「遠慮しないで入れよ!」
俺が若干緊張してるとシスイさんに背中を叩かれそのまま入る
「あら、貴方がユウくんね。いつもサヤがお世話になってるわね」
この人がシスイさんとサヤのお母さんか…ミコトさんに似てるなぁ…みんなそんな感じなんだろうか…
「サヤったらいっつもユウくんの話ばっかりしてね…」

「お母さん!?」
顔を赤くしてきたサヤが驚きながら近付いてくる
それにしても俺に教えて欲しい忍術でもあるのだろうか?
「ほらほらユウを玄関にずっと居させる訳にも行かないだろ!話は後でゆっくりな母さん」
「そうね。上がって上がって」
言われるがままに入り茶の間に付く
そしてお茶を出してもらった
1番最初に口を開いたのはシスイさんだった
「まさか大蛇丸がいるとはな…タクトの件すまなかった…」
「いやいや!シスイさんは悪くないですよ!!?どちらかと言うと…あの時倒せなかった俺が悪い…」
そう悲観的に言うと
「いやお前は今は下忍で相手は木の葉の伝説の三忍だぞ?お前がいくら強いからって1人で勝てる相手じゃない」
「まあ…そうかもしれないですが…」
「それに悲観的になってる場合じゃないぞ?お前たちでも抜かされた部隊があるんだか

らな？」
　我愛羅たちのグループのことだ
　俺たちより早くゴールしていた
　流石としか言えないが普通だったら俺たちの方が早かったのに…とも思う
「はい。そうですね…砂の部隊…圧倒的な強さがあると思います」
　まあ俺らのところも変わらないと思うけど
「そんなに砂のところ強いの？」
　そうサヤが尋ねてくる
「ああ。あれはやばい。まあ大蛇丸よりはマシだろうけどね」
「うーん…」
　顔を顰めて悩むサヤ
「どうしたの？」
「いや私なんかで上手くいくかなって…」
「いやいやサヤは凄いよ。絶対上手くいくって」
「でも…」
「んーじゃあ俺も頑張るから俺が試合に勝ったらサヤも頑張って勝って！」
　自分でもかなり意味わかんないこと言ってると思うけど…なんかサヤは納得したよ

うで元気に頷いて凄いやる気見せてた。本当によかった

「あのなぁ…ユウ…お前俺の弟子だけど妹に手出したらただじゃすまねーからな…？」

俺の耳元で囁くシスイさん

その瞬間はイタチさん程の恐怖だった

第３の試験開始

タクトが起きないまま時間は過ぎ、遂に第三の試験が始まることになってしまった
「まずは第二の試験通過おめでとう！」
そう言いながらアンコはユウと戦ったあとの大蛇丸との戦闘のことを思い出していた
「…あなた…あの班のユウくんとタクトくんより劣っているわよ…」
実際にどうかを確かめるためにその２人を注意して見ようと思っていたがその内の１人が大蛇丸に呪印を付けられていると聞いて驚いた
そしてまだ起きてないと聞き大蛇丸の考えについて考えていた
「そしてこれから第三の試験の説明が火影様からある！」
アンコさんが行ったあと三代目様とハヤテさんから説明があった
残ったのは２４人そこから試合が始まっていく
最初の試合はまさかの…
「第一試合　　ナミカゼ・ユウＶＳヤクシ・カブト」
カブトは今回棄権してなかった。何故かはわからないけど相手にして申し分ない、そ

してここで消耗させればハヤテさんを守れるかもしれない
「それでは第一回戦開始！」
最初は様子見落ち着いて行動する
「水遁・水衝波」
カブトから攻撃してきたそれならいつも通りのスピード勝負でいけるか…
「風遁・大突破！」
自分の周りに風を発生させ水を弾き飛ばす
水で相手の視界が塞がれているうちに手裏剣を口寄せして出す
「うちは流手裏剣術『伊吹』八連！」
修行でイタチさんに習った技の１つ
風遁を使って勢いを増し、その８個の手裏剣を曲げて防ぐことを不可能にする技
一見どこに投げてるんだ？と思わせてから急に曲げる技だ
その手裏剣を弾き返そうと水遁を使ってくるが
それだけじゃ終わらない
印を結び術を使う
「さらに追加で影手裏剣の術！」
さらに８枚の手裏剣が相手を襲う

正直ただの下忍だったらこれで終わる
他の担当上忍も驚いているが
まあやっぱり耐えていてボロボロになったように見せかけているがチャクラはしっかり余ってる
まあだけど舐めている。もう隠す必要も無い
相手を掠めた手裏剣には飛雷神のマーキングがある
そこに飛び後ろから攻撃して気を失わせるつもりで攻撃した
余りの急な不意打ちでカブトをぶっ飛ばす
「…すみません棄権します」
遂に言ってきた
「えーそれではユウさんの勝利ということでいいですか?」
「はい、大丈夫です」
「ゴホン！勝者波風ユウ！」
勝ちはしたが正直まだ余裕そうだった
「流石だなユウ！」
「ありがとう」

サスケからそう言われたので素直に返す
満足はしていないがサスケ自体に呪印は付けられてない
そう思い、タクトのことを気にかけながら仲間と勝利を喜んだ

タクトの秘密

シスイｓｉｄｅ

あれからシスイはユウの試合も見ずにタクトの看病をしていた。気を失ってもうかなり経つ

ユウからは大蛇丸に何かされたといっていた

実際心当たりがないかと言われれば自分にはない

ただ３代目に聞いた時変な間があった

やはり何かあるのだろうか

そんなことを考えていると

「っ…痛っ……」

「タクト!!?」

「先生…っち…体動かねーし…」

「安静にしとけ!!」

目を覚まし、何ら変わってないと少し安心したその時

「おい先生、化け狐はどこだ」

「え…？」
化け狐というのはナルトのことをよく思っていない大人たちが使う呼び方だ
タクトは今までナルトと仲良かった
それは以前の任務の様子を見ていても分かる事だった
「どこだって聞いてるんですよ。俺は今ならアイツを殺せる」
頭が追いつかない
なぜこんなナルトに恨みを持っているのか
「いや…待て。なんでそんなことをするつもりなんだ？」
「は？当然のことでしょ。俺が強くなるのはアイツを殺すためだ。そんなの昔から変わらねぇ」
当然初耳、色々と考えが浮かぶがこのままでは行ってしまう
しかしこのまま会わせてはいけないと考え
「おい、動くな。病み上がりだしな
それに殺人未遂するのは流石に止めねーと」
「先生…何言ってるんですか…先生じゃ俺には敵わない」
「がっ……!!」
そういうといきなり腹部を思いっきり蹴られ

壁を破り、外に出された
威力が尋常じゃない
「いくら先生でも邪魔するなら殺しますよ」
「お前…流石に怒るぞ…」
「勝手にどうぞ。火遁・烈火弾」
タクトがだした烈火弾の大きさはシスイのものを遥かに超え、とてつもない勢いで発射された
「っち……！封火法印！」
即座に常に持ち歩いている巻物を使って弾を封じ込める
これ以上好き勝手させる訳にはいかず
「お前いい加減にしろよ！火遁・鳳仙火の術！」
「火遁・大炎弾」
シスイの術と相殺する威力の火遁
「お前いつからこんな力を…」
「関係ないですよ。土遁・黄泉沼」
地面が沼に変わり、動けなくなりそうになるが
そこは瞬身の術でなんとか交わす

「瞬身のシスイと呼ばれるだけある
流石っすね先生。でもまだ甘い。火遁・烈火連弾」
「やばいな…」
さっきの大きさの烈火弾を複数個放つ
交わすことならともかくここには複数の家があった
流石に1人じゃ止めきれず直撃するところだった
「水遁・大瀑布の術」
しかし、その弾は当たることなく
水によって掻き消された
「何をやってるシスイ、特訓ならもっと別の所でしろ」
「フガクさん…!」
タクトは気づいてなかったかもしれないが
見られる外傷はしっかり治したため
すぐ知らせられるように病院からシスイの家の近く
つまりうちはの方で見られていた
そこで壁を破り、バンバン忍術の撃ち合いをしていれば
彼が出てこない訳ないのだ

「うちはフガク…さんか…流石に部が悪いよな…」
タクトがそこから消えようとすると
「悪いな。この状況じゃお前にも話を聞かせてもらうぞ
写輪眼」
幻術をフガクがタクトにかけた
「っ……」
タクトの動きが止まった
「……なんてね…火遁・灰塵隠れの術」
「なっ……！」
タクトは幻術を速攻破り、周りのものを燃やす
灰塵隠れでそこから消え去った
もちろん被害はシスイとフガクによって止められるが
写輪眼を使うほどの幻術をただの下忍が解けるわけが無い
特にタクトは幻術が特に苦手だったはず
やはり何かあるのだ
フガクに事の顛末を聞かれるが流石に追わないといけなく
影分身を使い、捜索と説明と他の人へ報告に別れ

行動した

第３の試験のまとめ！

タクトに関する事件が起こった頃
既に第三の試験はかなり進んでいた
２回戦　サスケＶＳヨロイ
「さて行くか」
サスケは手裏剣を持ち、ヨロイに当てに行く
イタチ譲りの手裏剣術と直近でユウを見ていた為
近距離から中距離までの戦闘がとても上手かった
そして相手が離れようとすると
「火遁・豪火球の術！」
方向に豪火球で動きを封じて無理矢理持っていく
これによって思うように動けず
どんどん距離が縮まっていた
「くっ…！」
しかしヨロイはチャクラの吸引術を得意とする

掴まれた時点でかなりのエネルギーを持ってかれていた
（体に力が入らねぇ…
なるほど…そういう奴か…それなら！）
「写輪眼！」
「っ…！幻術っ……！」
「貰った!!」
写輪眼によって行われた幻術でヨロイの動きを止める
そして大きく足を振り上げ頭から当てる
バリバリ直撃。あれは決まった
「勝者！うちはサスケ！」
サスケ凄いな。写輪眼完璧に扱ってるじゃん
俺も浮かれちゃいけないな。足元すくわれる
３回戦　シノＶＳザク
寄壊蟲によって腕の穴からでる技を塞ぎ
チャクラを食い尽くすことで
ザクが何もすることが出来ずにシノの勝利
４回戦　カンクロウＶＳツルギ

凄いとしか言えない。傀儡は使うことが出来ないから
非常に学びに繋がった
戦術も基本だけど本体だと相手が思ってる物が偽物で
偽物だと思ってる物が本物といい戦法
改めて見てすごい
５回戦　サクラＶＳいの
お互いの気持ちが渦巻きながら始まった試合
サクラのチャクラコントロールの上手さが序盤は目立ち
長い拮抗した肉弾戦の後、
いのが自身で切った髪を利用し心転身の術を使うが
内なるサクラに追い出され、最後の１発で相打ち

５回戦　テンテンＶＳサヤ
ここに来てストーリーと違うのか
サヤがテンテンと戦うのかぁ…
まあでもサヤ強いから結果見えてるけど…

「口寄せの術!!」
テンテンがたくさんの忍具をだして投げる
「火遁・豪火球の術!」
ただサヤはうちは、豪火球をうって武器を消していく
「まだまだ!」
またしても忍具の口寄せ
「ごめんなさい!風遁・裂空掌!」
一つ一つ交わしていき、裂空掌直撃
「勝者!うちはサヤ!」
まあ勝利した
「サヤおめでとう!!」
「ありがと!」
「まだ次まで時間があるからシスイ先生の所にでも行ってくるよ。タクトが心配だし」
「うん!わかった!」

6回戦　シカマルＶＳキン
相手の糸による戦法を逆手にとって

自分の影を細くして影真似
その後ブリッジ状態にシカマルとキンがなるが
キンの後ろには壁
頭いい方法でシカマル勝利

天才＆秀才ＶＳ天才

「……？」
ユウがタクトの様子を見に来ると
そこはまるで戦闘があったかのような跡があり
シスイもタクトもいなかった
「ユウか…いいタイミングといえばそうだな…」
「フガクさん…？シスイ先生とタクトはどこに？」
「それが……」
フガクさんに事の顛末を話してもらった
タクトが起きた後ナルトに憎悪を向けて
それを止めようとしたシスイ先生と
近くにいたフガクさんに止められ、現在逃亡中だと
「え……!?そういうことなら…俺が行ってきます
タクトには以前飛雷神の印を付けていたので」
「……わかった。しかしシスイを連れて行け

アイツはお前の思っている以上に強い
舐めてかかれない存在だ」
フガクさんがそこまでいうとは
「わかりました」
そういって飛雷神でシスイ先生のところまで飛んだ
今の状況を説明し、すぐに行くことに

突如目の前に現れた俺に向け
一歩下がって手裏剣を投げるタクト
タクトがいたのは木が多く生える森のような場所

「っち……ユウとシスイ先生かよ…額当てにマーキングされてたのか…」
「お前…！本気で当てるつもりだったろ！」
「るっせーな…」
そう言ってマーキングを付けてあった額当てを地面に捨てる
「まあお前とやれるのも貴重だしな
シスイ先生には悪いけど退いてもらおうかな

口寄せの術」
そういってタクトが出したのは二足歩行の狼
いわゆるオオカミ人間のような口寄せだった
「タクトかぁ……久しぶりだなぁぁ……」
「うるせえ…シスイ先生を頼む」
「あの写輪眼か…いいねぇ……」
そういった直後その狼が地面を蹴り
有り得ない速さでシスイ先生に近づいていく
「……甘い！火遁・豪龍火の術！」

その速さにもシスイ先生は冷静に対応し
狼に火球を当てる
森を燃やして大丈夫なのかは知らん
「いいねぇ……こりゃ楽しめそうだ」
「ユウ、タクトを頼んだぞ」
喰らってもピンピンしていた
そんな状況把握ばかりしていると

「何余所見しているんだよ！」
　タクトからクナイが飛んでくる
「金剛封鎖」
　鎖を出してクナイを弾く
「水遁・水龍弾の術！」
　しかし、それでは収まらず水龍弾……
　いやタクトって水遁使えたの!?
　なんてことを考えながら対処
「水遁・水龍弾の術！」
　水遁は俺の十八番
　流石に威力は俺の方が上だった
「水剛封鎖！」
　タクトを拘束しようとするが
「土遁・土流壁」
　土流壁に弾かれる
　いや土遁も使えたのかよ
「手裏剣影分身の術！」

攻撃の手を辞める訳もなく
えげつない数の手裏剣で相手を攻める
「風遁・大突破」
これもまた凄い威力の大突破によって
手裏剣が地面へと叩きつけられる
「飛雷神切り！」
手裏剣影分身の中３つ程度上の方へ投げておいた
その手裏剣がタクトの横を通った瞬間に切る

「こんなもんかよ…ユウ…雷遁チャクラモード」
「っ……！速いっ……！」
ギリギリのところで躱されて
「火遁・烈火弾！」
雷遁チャクラモードによって背後を取られ
その後烈火弾が直撃
「っち……！」
変わり身と雷遁影分身の組み合わせで

防ぐことはできた
いやいやいや五大性質…全部使えるの？は？
なんて考えてる暇もなく
雷遁影分身で痺れている間に金剛封鎖で拘束する
「はぁ……やるな…ユウは…でもちょっと甘くないかな」
そういって変わり身された
しっかり拘束していたはずなのに
「俺も本気でやんなきゃいけないみたいだわ流石ユウ」
「お前…マジでふざけやがって…！」
「影分身の術」
影分身で５人に分身したタクト
それぞれが印を組み始め
「「「「五遁・大連弾の術！」」」」
お前猿飛一族だからって暴れすぎだろ!!
なんとか飛雷神でさっきタクトが落とした額当てまで飛ぶ
「動きが単純過ぎないかユウ」
先回りされクナイが当たりそうになった瞬間

「うちは火炎陣」
「あっつ……!!!」
シスイ先生が助けてくれた
シスイ先生が相手していた狼を見ると
「チッ……」
それはまたボコボコにされていた
表面からは火傷のあと
その後幻術にでもかけられていたのか
体もまともに動かない状態までになっていた
「お前折角呼んでやったのに意味ねーじゃん…」
「……」
狼は黙るだけ
「まあでもいいや。楽しめたし
それにこれならアイツを殺せるしな」
「お前……!」
俺が近づきに行こうとすると
「灰塵隠れの術」

周りを発火させ逃げようとした
「その手はもう知っているぞ！水遁・水龍弾の術」
シスイ先生が防ごうとした
しかし
「潜影蛇手」
「大蛇丸……」
大蛇丸が水龍弾を潜影蛇手で
防いで逃げるのを許してしまった
「あらら。シスイ先生とユウくんね
貴方たちにはもちろん興味があるけど
私にはもっと面白いものを見つけちゃったから
そっちを追わせてもらうわ。ふふふ」
「水遁・水断波！」
俺が大蛇丸に直撃させるが影分身
それもそのはず大蛇丸は今は
中忍試験の会場にいるはずなのだから
「やられた…」

「急ごう！みんなには伝えてある！お前は中忍試験も控えているしここからは俺たちに任せろ！
マーキングも外されたみたいだしな」
「はい……！」
今回は俺の悪さが目立った…
フガクさんの言った通り
油断しちゃいけない相手だったのに…
まだ…全然甘い…のか
タクトにはまともにやってもいい所五分五分だろうしな…
まだ足りない部分が多すぎる……
そんなことを考えながら俺たちは
中忍試験の会場に向かった

ナルトＶＳキバ　成長の証

ユウとタクトが激戦を繰り広げていた頃

７回戦

「うずまきナルトＶＳ犬塚キバ」

「もう勝ったも同然！いくぞ！赤丸！」

「キバァ思いっきりこいよ！ちゃんとな！」

ナルト対キバ

ナルトは原作よりユウのことがあって強くなっている

それはずっと近くで見ていたサスケやカカシが分かっていた

「１発で終わらせてやるよ！」

「ふーん！じゃオレも！」

「擬獣忍法　四脚の術！」

手と足を使って蹴ることでとてつもない勢いが生まれる

「いくぜ！」

ただずっとユウと特訓していたナルト

忍最速に近いユウと比べては話にならない
「おっ!!あぶねーな!!」
突撃してくるキバを綺麗に交わす
その光景を見て他の会場の人達が驚く
昔からドベだったナルトがあんなにスムーズに動くとは
ユウが目立ってたためそこまでナルトが目立ちすぎることはなく、ただドベというイメージなのだ
「お前よけんじゃねーよ!!」
突撃して逆ギレしてしまうキバ
「お前！ほんとに怒ったからな…!!」
「勝手にごちゃごちゃ言うなよ！」
「行くぜ！赤丸!!」
煙玉を投げて視覚を塞ぐ
そして連撃
「ぐっっっ!!」
煙から出ようとするナルトに向けて赤丸が噛みつきにいく
「ワン!!」

煙が引くとナルトが倒れて赤丸がキバに近づいていく
「良くやったな！赤…」
匂いで偽物だと気づくが遅く、噛みつかれる
「てめー！変化の術…！」
「てめェ犬くせーってばよ!!ぺっぺっ!!」
影分身に変化の術の組み合わせ
この技はかなり高難易度なのに凄いと周りが思う
「ッチ！少しはやるじゃねーの…次はマジだからな！」
「ふーん！じゃ…オレも！」
そういってキバは赤丸に兵糧丸を食べさせ
赤丸を赤くする。そして自分も食べる
「獣人分身!!」
赤丸がキバの姿になる
兵糧丸は三日三晩休まず戦えるとまで言われる秘薬
高蛋白で吸収もよく、興奮作用鎮静作用の成分まである
さらにチャクラが一時的に倍増
「行くぜェ！四脚の術！」

さっきより早く動き、攻撃をしていく
ナルトは体中のチャクラを足に集めても逃げ回るのがせいいっぱいになっていた
しかも少しずつ掠っていき、体力が削られていく
やばいと思い上に飛ぶ
「くらえ!獣人体術奥義!牙通牙!!」
直撃　流石にダメージが大きく倒れ込む
「この辺が実力の差ってやつだ」
「へっ…!なめんなよ…!オレは火影になるんだよォ……!!」
しかしすぐに立ち上がって元気な声を上げる
「てめェ…!なんでそんなに動ける!」
「へへっ!ユウから教えてもらった方法なんだよなァ!」
会場の上忍以上の忍は見えていた
当たる直前に印を結び、風遁・裂空掌を
攻撃に重ねることで勢いを削っていた
ふっとんでいったのは自分の風遁に耐えられなかったからだ
「キバ、オレと火影の名を取り合ったら…お前ェ負け犬になるぞ!!」
「へっ!ボロボロのくせに何言ってんだ…よ!!」

また牙通牙をしに行く
「なんども同じ攻撃を喰らうかよ!!」
そうは言うが何度も良けれるものでもない
ナルトはキバに変化する
「わかってんだよ!お前がナルトなのはっな!」
キバはチャクラを鼻に集中することで何万倍にも出来る
ナルトを殴るキバ
しかしそこには赤丸がいた
「なに!?ならこっちか!!!」
そこで殴られたナルトは
また赤丸になっていた
「オラー!!!!」
最初に殴られたのはナルトであっていて
殴られた瞬間に赤丸に変化して混乱させていた
「ナルトってあんなに頭のキレ良かったっけ…」
周りからそう言われるほど柔軟な考えだった
「さて!本気で行くぜェ!!多重影分身の術!!」

実際の原作では5人だったが
今回は５０人レベルが違う
「くらえぇぇ!!!」
「ぐぅぅぅ!!」
確実に1発ずつあてていく
「最後は決め手の！風遁・烈風掌!!!!」
分身が消え、本体のナルトがキバの腹に当てる
「がハッ…!!」
「勝者うずまきナルト!!」
「あのナルトがキバに勝ちやがった!!!」
「オオオオ!!!」

悔しさと失望

中忍試験に戻ろうとして近道である
人通りの少ない道を通っているけど
背後から気配を感じ、剣を向ける
「あらら、バレちゃった」
「なにしてるんすか…カブトさん…」
「中忍試験ではボコボコにされてしまったし、ここかなと思ってね」
笑顔で話すカブト
「他の試合を見たいんで、遠慮しときます」
「ふーん。そっか。じゃあこれならどうかな
僕に勝ったら猿飛タクトの秘密を教えよう」
その言葉に歩みを止める
頭をフルに活用して止めようとする
もともと三代目に聞けば問題ない
そう考えているのに

「本当か？」
なんでこうも強気に言ってしまうのか
絶対にここで時間を使うべきじゃない
「ああ。約束しよう」
頭では分かってるのに
「……わかった」
承諾してしまった
「そうこなくっちゃ」
「早く構えろ」
「怖いなぁ。タクトくんにやられてムキになってる？」
煽ってくるカブト
「黙れ…！」
「図星かなぁ。さあ行くよ」
カブトは何か丸薬を口に入れて攻撃してくる
しかし、さっきのタクトの攻撃と比べては速度もパワーも大したことがなかった
「水遁・水陣壁」
自分の周りに水の壁を作り、カブトが突撃してくる勢いを弱める。そして胸付近に打

撃を1発当てて吹き飛ばす
「大人しくしててくれ。水遁・爆水衝波！」
大量の波がカブトを押し潰そうとする
他の水遁とは訳が違う
さっきのタクトとの戦いで疲れてるとはいえ
水遁には自信がある
「土遁・土流壁」
土の壁を作って大きな波を防ごうとするが
防ぎ切れない。壁が波によって当てられる
水遁を舐めるな
「っ…土遁・多重土流壁…！」
流石に不味いと土流壁をたくさん出す
やっとその波が止まる
「くっ…」
「やるねェ。その水遁もっと見せてくれよ…！水遁・水龍弾の術…！」
水龍弾を打つ
これは確かにタクトのより強いかもしれない

だが
「水遁・水龍波」
俺の水遁はもっと上を行く
俺の水遁に勝てる奴など、この里じゃ三代目とサスケさん、イタチさんくらいだ
「ぐっ……!やるね……!」
かなり押されながらも笑顔を見せるカブトに恐怖を覚えて
金剛封鎖も発動し、しっかり決めにいく
「終わりだ」
「ふふ。それはどうかな」
「っ……!!」
感知が遅れていたが、周りには音隠れの忍
大体１０人くらいだろうか…?
この時期に…こんな音隠れの忍いたはずないのに…
やっぱりもともとの話と変わってるのか…?
そう考えてると周りから手裏剣やらクナイやらを投げられる
しかし、手裏剣をピッタリ当てるみたいな手裏剣の操作はイタチさん直伝だ
「うちは流　手裏剣術　［瀑］・四連」

俺の水遁のチャクラの刃をつけることで形を好きに変えられる手裏剣ができる
その手裏剣の大きさを拡大し、全ての投擲を弾く
「飛雷神の術」
相手の投擲物を弾いてそのままカブトに向かっていく
その手裏剣にいつも通り飛雷神の印を組み込んであるためそこに飛ぶ
「終わりだ」
チャクラ刀を首元付近に置く
カブトは大蛇丸とも近い関係にあったはずなので
他の音隠れの忍たちも一瞬動きが止まる
その隙に影分身を出し、音隠れの忍の背後をとる
「っ……！速いなぁ……でも君に切れるのかな」
「なんだと…!!」
「甘いんだよ」
「ぐぅっ…!!」
後ろ蹴りで後方に押される
「わかってないみたいだねェ……君は人を切れないんだ」
「なっ……！」

カブトから言われて驚愕する
確かに今まで誰ひとり切ってはいない
金剛封鎖などの拘束方法や相手の動きを止める方法ばかり…
決め手に掛けているのは間違いなかった
「僕もさっきの戦い見ていたけど、君が本気でやっていたら勝ってたのは君だと思うけどね…
頭で勝手に制御されてるのかな?」
なんでだ
木ノ葉崩しやその後の大戦のために備えていたはずだった
そのために忍術や幻術を学んだはずだった
それなのになぜ…
「君は実力は僕よりも強いかもしれない
でも忍としては僕の方が上かな」
「くっそ…!!黙れ…!雷遁・迅雷箭!!」
やけくそになり、雷遁の球をぶつけにいく
「そんな術は効かないよ。土遁・土流壁」
「こんな…!普通の土遁に…!」

「性質変化には相性があるからね
そんなの分からなくなるくらい動揺してるのかな？」
「だまれ…！」
切れない理由、その答えははっきりしていた
自分がもとの記憶を持っているから…
日本で過ごしてきた平和な人間だったから…
人を攻撃することを躊躇ってしまうんだ
なんて、弱い人間だろうか
時代が違えば正義も違う
歴史上では戦争が強い人が偉い時だってあった
そういう時代なんだナルトの世界は
そんな思想が頭を巡り、体の力が抜ける
そもそもタクトとの戦いもあって
チャクラが少なくなっていた
肉体でも精神でもボロボロだった
「君は僕らのとこに来てもらうよ」
そういって近づいてくるカブト

「俺の部下に手を出さないでくれないか」
「っ……!!」
「……シスイ先生…!」
「火遁・鳳仙花爪紅」
周りの音隠れの忍を火遁を使うことで一瞬で攻撃して拘束する
その後カブトの喉元にクナイを当てる
完璧だった。少しも隙がない
流石瞬身のシスイだと思わされる
これが他里に名を轟かせる忍なのか
「お前には眠ってもらうぞ。幻術・写輪眼」
「な、ぜ……」
眠るカブト、天才としか言えない……
手際が良すぎる
「ど、どうしてですか…?」
「ん?」
「だってさっき…連絡するって…」
「終わらせてきたぞ」

「早っ…!!」
「話は少し聞いてたぞ。大丈夫だ
　お前はまだまだ若い。心配することなんてないからな」
「ありがとうございます…!」
　年甲斐にもなく泣いてしまった
「泣くな泣くな。まだこれからだぞ」
「はい……!」